
魔王国を建国しよう

分福茶釜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王国を建国しよう

【Nコード】

N0523X

【作者名】

分福茶釜

【あらすじ】

変な勘違いで魔王となった少女は、異形の者どもを集め魔王国を建国することにした。ところがどっこい、異形の者どもはそう簡単に言うことを聞くわけがなくて……
それに加えて、なんか人間からも追われることになったりなんたり……まさに踏んだりけつたり、泣きっ面に蜂……そんな物語。

第一話 闇色の少女と黒い犬

薄暗い大広間に宗教色の強そうな服を着て、人間が何人か集まっている。

「我々の世界に舞い降りて、今、救いの光を！」

1人の男が、そう叫ぶと集まっていた人間達の中心に描かれていた陣の様なものに光が集まる。その光を見て集まっていた者たちは皆、歓喜の声を上げたが、光が薄れてその場にあったものを見て、皆は悲鳴に近い声でさわぎだした。
そこには、闇色とも呼ばれる黒い衣を身にまとい、漆黒の髪を持ち、真っ黒な眼を見開いた1人の少女がいたのだ。

くろいまお

黒井真央は訳が分からなかった。

確か自分は、学校から家に帰宅する途中だった筈なのだ。なのにここはなんだ？

訳のわからない服を着た人たちが自分を見て、驚愕と恐怖で悲鳴に近い声を出している。

驚いているのはこっちだと思うのだが。

まず彼女は、自分の身を確認した。服は学校の制服で帰宅途中と変わりはない。持っていたはずの鞆はなかったが、そんなこと気にしている余裕はない。

今は特に襲われた様子はないが、この人間達が誘拐犯の様なものだとしたら大変だ。

自分の身が安全なのを確認すると、彼女はここから逃げ出すために、周りの様子を再度確認した。

「言い伝えによると、黒い衣をまとった娘は災厄をもたらすと言われているぞ！！一体どうするのだ！！」

「おお、恐ろしい・・・早くこんな娘など殺してしまえばいいのだ！！」

物騒な言葉を聞いて、彼女は体を震わせた。

小説やテレビでしかお目にかかれない状況に現在進行形でおかれているのだ。

そんな中、1人の老人が声を上げる。

「さて、この女子を殺してこそ何が起るかわからん。ここはこの娘の記憶を抹消し、早急に代わりの救世主を天より呼ぶしかあるまい。」

記憶を消す？一体何のことを言っているのでしょうか。

薬か何かで廃人にでもされるのであろうか・・・

呆然としている彼女に、若そうな者が、彼女を拘束するために、近づいてくる。

「いやあ、来ないで！！」

それを見て、彼女は恐怖で震える足に鞭打ち、その場から逃れようとするが、それよりも早く若者の手によって、肩を掴まれる。

そしてその直後、腹に強烈な痛みが走る。

そう、1人の若者が彼女の腹に鋭い蹴りを放ったのだ。

またそれでは足りずに、殴る、蹴るを複数の者に繰り返され、彼女は鼻から血を出し、さらに吐血する。

「は・・・つぐあ・・・」

鼻と口から出る血で上手く息が吸えない彼女は、泣いて許しを請うが、全く聞いてもらえないどころか、更に彼女に対する暴力は強烈になる。

「そろそろ良いじゃろう。」

先ほどの老人が口を開き、彼女には理解できない何かの言葉をしゃべりだす。

彼女は、すでに動けるような状態ではなかったが、強烈な頭痛によってその場で悶え始める。

いたいいたいいたいいたいいたい・・・誰か助けて！！

意識を失う直前、彼女は誰かに呼ばれた気がした。

意識を失った彼女を確認して老人は言う。

「ふん、では地下牢にでも連れて行くがいい。残りの者は早速、次の救世主を呼ぶ準備じゃ・・・」

皆がそれに頷き、各々の仕事に移ろうとした時、その場に若い男が駆け込んでくる。

「た、たいへんです!! ま・・・魔物の群れが!! 魔物の群れがここにやってきます!!」

「何じゃと!?! ここは魔物にはわからぬように結界を張ってあったはずじゃろう!!」

「やっぱりあの小娘のせいではないか!!」

「だからあの時殺しておけばよかったのだ!!」

先ほどまで、落ち着いた雰囲気だった広間は、少女が現れた時よりもさらに、混乱してしまう。

「皆の者、落ち着け!! ここは早急に逃げ・・・」

混乱を落ち着かせようと、リーダー格らしい老人は指示を出そうとしたが、その言葉を最後まで言い終わる前に、老人は動かぬ屍となっていた。

「ひいいい!! 化け物だあ!! 助けてくれえ!!」

老人を殺した異形の化け物達はその場にいるものを手当たり次第に殺し始めた。

マオ・・・マオ・・・起きなさい!!

なんだかひどく聞きなれたような、だけでも何年も昔に聞いたような不思議な声が彼女の耳に届いた。

その声によって起きた彼女は、辺りを見渡す。

そこは多くの魔物に襲われ、あっけなく死んでいく人間達の断末魔であふれかえっていた。

しかしそれを見ても、彼女はまるで感性が抜け落ちてしまったかのような表情のない顔であたりを見渡すだけ。

そこで、ふと後ろに人気を感じて、振り返ると、怪物に襲われているのと同じ格好をした生き物が彼女を血走った目で睨みつけている。

「この黒い娘さえいなければ……しねえ!!」

そう言うとか鈍器のようなものを彼女に向かって振り下ろしてくる。

彼女は、紙一重でそれを交わすと、この地獄の様な場所から逃げるため走り出した。

彼女を襲った男は、追いかけてしようとしたがあっけなく怪物に襲われ、息絶えてしまった。

しばらく無我夢中で走った彼女は、なぜ自分が走っているのか不思議に思い立ち止まる。

「私は何で走っていたんだっけ……」

すでにここはどこかの森の奥。

何かが気味の悪い声で鳴いている。

「ほう、我が縄張りに人間の小娘がいるとは……」

低いうなり声の様なそれが聞こえた方に彼女は首を向ける。
そこには巨大な黒い獣がいた。

「ほう、我を見ても驚かんのか、小娘……珍しいな……」

不思議そうな顔で自分を見つめる娘に、少し驚きつつも、にやりとその獣は笑うと、大きく口を開けて彼女に襲いかかる。

彼女は紙一重でそれをかわすが、足首をひねってしまい、その痛みで顔をゆがめる。

「ふふふ……あっけなかったな娘よ……」

黒い獣は、再度襲おうと彼女に向かっていくが、顔を上げた少女の瞳を見て何かの威圧を感じ、襲うのを躊躇してしまう。

対して少女は、獣を人睨みすると、今までの疲れが出たのか、そのまま倒れてしまった。

「おい!! どうした小娘!!……」

どのくらいたったのだろう。

鳥がうるさく、ちりちりと鳴く声で彼女の眼は覚めた。

脇を見ると小さい毛むくじらの生き物が丸くなって寝ている。

「あの大きな奴はどこに行っただろう・・・」

そう呟くと昨日自分を襲ってきた巨大な獣と同じ声で小さい毛むくじやらがしゃべりだした。

「貴様！！いったいあれからどれだけたっていると思っている！！そして俺に一体何の呪文をかけた！！」

「呪文？あさ？・・・一体何のこと？・・・」

「何も覚えてないのか！！昨日貴様にかけられた変な呪文のせいでこんな妙チクリンな姿になってしまったではないか・・・さっさと戻せ！！」

「さっさと戻せと言われても・・・」

「ほ・・・ほんとに昨日の記憶がないのか？」

「昨日どころか、自分が誰なのかもわからんぞ・・・」

「な、なんだと！！というか俺のしゃべり方を真似するな！！！！」

「まね？マネとはなんだ・・・私は真似などしない・・・お前のしゃべり方が移ったのだ」

「そのしゃべり方がまねていると言っているんだ！！まあいい！！何か覚えていることはないのか・・・」

「覚えていることって言っても・・・起きたら、わけのわからない

場所だったからな・・・」

うーんとしばらく考えて、ふと少女は思い出す・・・

「おお、確か、まおうと誰かに呼ばれていたような・・・」

曖昧な記憶を頼りに、彼女が答えると、黒い毛むくじゃらはびっくりした様子で大声を上げる。

「ま、魔王だと！！！！あの時感じた威圧はそれか！！！！」

「まおう？・・・」

話についていけない彼女を1人置いて、毛むくじゃらは、その場をグルグルと回りながら考え込んで、彼女に向かって口を開く。

「魔王というのは魔物たちの頂点に君臨するものだ。きっと何かの事情があつて身を隠しているんだろう！？そうに違いない！！だが、まさか魔王にお目にかかれるとは！！昨日のご無礼をお許しいただきたい・・・」

そう言うとき毛むくじゃらは頭を下げてくる。

なんだかよくわからないが、魔王というのはエライらしい。

そんな時、毛むくじゃらと同じ容姿の生き物がすぐ脇を通り過ぎていく。

「お前の仲間か？あれは・・・」

「仲間？・・・あああれは犬だよ。別に仲間ではない。」

「ふうん。だがそっくりだな・・・そうだ・・・お前、では味気がないだろう・・・イヌという名前はどうか？」

「イヌ！？それは俺の名前か！？い、いやだ！！お前の方がいい！！」

「まおーにたてつく気か！？」

「むぐううう」

やはりまおーというのはスゴク偉いらしい。

だが、ここまで嫌がる名前で呼ぶのもなんだかかわいそうだ。

「そういえば、お前は私と同じだな・・・」

一瞬何を言われているのかわからなかった獣は彼女が自分の服を指差しているのを見て何が言いたいのか理解する。

「確かに同じ黒色してるな。」

「くろ？確か奴らも黒がなんとかか言っていたような・・・」

「やつら？記憶が戻ってきたのか？」

何かを思い出しただろうかと言ったと聞かされた獣は、期待を込めて聞くが、・・・それ以外全く思い出せん・・・という彼女の言葉を聞き落胆する。

「そうだ・・・黒が良いんじゃないか？クロ・・・響きもよい・・・」

「なんだか安直な気もするが、イヌ呼ばわりされるよりかはましだ

な・・・」

くつくつと笑う彼女に、クロは溜息を吐いた。

第一話 闇色の少女と黒い犬（後書き）

転生者の心の葛藤を描写するのが苦手な作者ですので、主人公には記憶喪失で好き勝手してもらうことにしました。

第二話 朝日の町 アサンテルミン

「おい、二本足の生き物が沢山いるぞ!!クロ」

「ありゃ、人間だよ。お前だって似たような格好してるだろ。」

ここは、ローレシア大陸の南、エンジニア王国領アサンテルミン。
通称、朝日の町。

多くの人間が行き交い、とても活気のある町だ。

そんな所にやってきたのは、町を興味津津の様子で、きよろきよろと見ている他称魔王、そして真っ黒い犬の2人。

「お嬢さん!! 一人旅かい? サービスだ!!」

体格のいい男が自分の店の肉の串焼きを彼女に差し出す。

「くれるのか?」

「ああ、美人さんに特別サービスだ。」

びじんとはなんだ?と聞こうとする彼女の言葉をさえぎるようにわんわんわん!!と吠えるクロ。そのままどんどん走って行ってしまう。

「おいっ!! どこに行く・・・クロ!!」

彼女はクロを追いかけるが、全速力で走る犬に敵うわけもなく、クロの事を見失ってしまった。

「ハア・・・ハア・・・なんだあの速さは・・・まったく、まおーを置いて行くとはいいい度胸をしている。」

彼女は息を整えると、先ほどもらった肉の串焼きをほおぼる。

「・・・・・・・・口に合わん・・・・・・・・クロが帰ってきたら食べさせよう・・・・・・・・」

もぐもぐと固めの肉を口に含み、飲み込むタイミングをはかっていると、兵士の様な格好をした2人組が彼女に声をかける。

「おい、その娘。見たことがない格好だが？どこの国の者だ？」

高圧的な物言いに彼女は明らかに不機嫌そうな態度になり、声に嘲笑を込めて言い放った。

「貴様らに言う必要などない。分かったならさっさと私の視界から消えろ、不愉快だ。」

まさか自分達がこんな口を聞かれるとは思わなかったのか、男達は一瞬呆けた後、怒りで大声を出す。

「貴様！！我々を誰だと思っている！？この街の管理をしている役人であるぞ！！」

「貴様の様な小娘を豚箱にぶち込むのなんて訳ないんだぞ！！」

「・・・・・・・・うるさい、小物は騒ぐしか能がないのか・・・」

ほとほとあきれたという風に首を振る彼女は、その後、本当に役人につかまってしまった。

クロは、肉屋で何やらこちらの様子をうかがっていた小物の魔物を捕まえることに成功した。

「貴様、なぜこちらの様子をうかがっていた？何か用があったのか？ん？」

「うるせえ・・・貴様には関係ない。・・・人間ごときに仕える犬め・・・」

なお悪態をついてくる小物にクロは鼻で笑う。

「あのお方は魔王だ。貴様には永遠に縁のない方だよ・・・死ね」

「魔王だと！？ば、馬鹿な！！ぎゃあああああああ」

小物を自分の爪で切り刻み消滅させる。

そこで、やっとクロは自分の主である彼女を置いてきてしまったことに気付く。

「勝手な行動をするな！！とか言われて怒られんのかな・・・」

ぷらぷらとやる気のない足取りでクロは彼女と別れたところまで戻る。

ところがそこで待っているだろうと思っていた彼女はどこにも見当たらなかった。

「おいおい、まさか見捨てられちゃったのか？・・・」

当てもなくさまよっていると、広場の中心で何やら人が騒々しく騒いでいる場所を見つけたので、クロは何か手掛かりがあるかもしれないとそこに向かった。

果たして・・・そこにクロの目的の彼女がいた。

しかもただいたのではなく、見世物になっていたのだ。

「この者は、役人である我々を侮辱した。すなわちそれは我々の王国を侮辱したことに等しい！！よってここに、公開処刑を開始する。」

随分と勝手な話だ。だが見物の客は随分な暴論を吐く役人には目もくれず、一体どのような者が公開処刑になるのかの方が気になるらしく、さっきから、縄で縛られている彼女の方に好奇の視線を寄せている。

クロはどうしたものかと考えた。この状況では彼女を助けるのは難しい。前のような巨大な体でなら力技で切り抜けられたかもしれないが、今の彼はその辺の野良犬と同じ体系だ。ここにいたくさんの人間達全員の相手を出来る自信はない。

しかし、そんなクロの心配をよそに、当の彼女は全くの興味がなかったように、役人の身勝手な罪状を聞き流し、見物人の視線も無視して、無表情に空を見上げている。

「罪人は、今日から10日間、この街の中心で晒し者として罪を悔いてもらう。この期間ならばこの罪人に対してどのような行為をしても許されることとする。」

役人は自分で作ったのだろうか、稚拙な内容の刑罰が書かれた紙を読み終わると、道に立てられた木の丸太に彼女を縛りつけ、そして刑罰を執行中であるという看板を立てると、その場を立ち去って行った。

役人が立ち去ったあと、見物人の群れが一斉に彼女のもとに近寄る。

「いや／＼なかなかの別嬪さんじゃね／＼か。」

「おい、確か10日は好きにしていいたよな？」

近くに来てじろじろと見てくる見物人を彼女は鬱陶しそうな視線で一蹴すると、そのまま目を閉じてふて寝し始めた。

「おい、ねるな!!小娘!!」

一人の男が小石を彼女に向けて投げる。ちょうどそれが彼女の頭に当たり彼女はうっすらと目を開けて、石を投げた男に怒気を込めて言い放つ。

「私の前から消え失せろ。」

その言葉を聞いた男は、それを自分が馬鹿にされていると思った怒りか、罪人である彼女より自分が圧倒的優位に立っていると思っていたことを彼女に完全否定されたのに対する羞恥のせいか、顔を真っ赤にさせて怒鳴った。

「罪人が調子に乗ってんじゃねえ!!」

そのまま怒りに身を任せ彼女に拳を叩きつけようとした時、男の腕に真っ黒い犬が思いっきり噛みついてきた。

「ぎゃああああああ」

男の腕からは血が大量に流れ出し、男はそのまま腕を押さえて倒れてしまった。

その間に、真っ黒い犬は、彼女を縛っていた紐を噛み切ると、彼女の服を引っ張りながら全力疾走した。

その様子に村人たちは呆然としていたがすぐに、我に返って騒ぎだす。

「罪人が逃げたぞ!!」

「はやく役人様に知らせにやあならん!!!!」

町のはずれまで少女を引っ張ってきたクロはやっと走るのをやめた。

「何であんなことになってたのか説明しろ・・・」

「説明しろと言われても・・・」

クロは言い淀む彼女をさらに追及する。

「なんで、魔王のお前が人間ごときにつかまっているんだ!？」

彼女はそんなクロを見て小さく鼻で笑い答える。

「そもそも、クロが私から離れたのが悪いのだ。私などクロに守ってもらわねば、人間とかいうものよりも弱いかも知れないな。」

「どこにそんな魔王がいる!! そもそも何で俺がお前を助けなきゃならないんだ!？むしろ魔王のお前が俺を守ってくれよ!!」

クロの言葉に彼女はきょとんとした様子で、首を傾げる。

「・・・なんだ、お前は、私を守ってくれるためについてきたわけではないのか？」

その言葉に、クロは黙り込んでしまった。

別にこの娘に助けてもらおうという気はなかったのだ。むしろ魔王であるのに弱そうな彼女に少しでも力になりたかったのが本音である。この少女はクロをひきつける何かを持っているのだ。

だがそれを言葉にするとなんだかこっぴどかしい。

「ふ、ふん・・・ただ魔王についていけば面白そうだから、ついて来ただけだ。それにこの姿を戻してもらわねばならないだろうが・・・べつに・・・お前を助けるためについてきたわけじゃないからな。」

「ふふん・・・そんな真っ赤な顔で言われても説得力がないな。」

「な・・・なんだと!!」

にやにやとからかうように笑う彼女に、クロは全身を真っ赤にさせてキャンキャンと吠えるのであった。

第二話 朝日の町 アサンテルミン（後書き）

なんじゃこりゃ・・・（笑）

第三話 王立図書館と悪魔貴族

エンジニア王国、城下町ロンダリス ここには世界でも有数の巨大図書館がある。

これがエンジニア王国の誇る、エンジニア王立図書館。

ロンダリスはアサンテルミンから、飲まず食わず不眠不休で女と犬が歩くとする3日ほどかかる。計算上の話であるが・・・実際にはそんなことできるだろうか？・・・

「おい！！クロ！！貴様がちんたら歩いているから3日もかかったではないか！！」

「お前が俺に乗ったからだろうが！！俺は馬じゃないんだぞ！！っていうか何でそんなぴんぴんしてんだ・・・飲まず食わずで・・・」

「ふん、私は少食なのだ。それにお前が休んだときに私は木に実っていた果実を食べたからな・・・あまりうまいものでもなかったが・・・」

「なんだと！！貴様は一回常識というもの知った方がいい！！図書館にでも行って、可愛い獣への接し方を覚えてこい！！！」

クロをからかっていた他称そして多分自称魔王は、図書館という言葉に興味を示す。

「としょかん？なんだそれは？」

その言葉にクロはそんなこともしらないのかと呆れたように、彼女に図書館のことを説明した。

「図書館で言うのは、様々な事が書かれた書物がそれはもう、うんざりするくらいたくさんあるところだ。確かこの城下町にデカイ図書館があったと思ったんだが・・・もしかしたら、魔王についての情報もあるかもしれないな・・・」

「ほう・・・それはぜひ行ってみたいものだな。」

しばらく歩いて、2人は図書館の受付へとやってきていた。

「すみませんがお客様、わんちゃんのご入館はご遠慮させていただきます。いております。」

優しそうな、若い受付係の女性は苦笑いしながら、当たり前のように犬を連れてきた彼女を見つめた。

珍しい黒髪の女性だ。それに漆黒の衣を身にまとっている。

それゆえに肌の白さがより目立ち、美しい顔を一層引き立てている。

どこの国の人なのだろう・・・そんなことを受付の女性が考えていると、無表情のまま彼女が口を開く。

「わんちゃんとはこいつのことなのか？」

「え？あ・・・はい。そうですが・・・」

「ふうん、おいクロ、だそうだがどうするんだ？」

彼女は黒い犬を見下ろししゃべりかけるが、黒い犬はただ彼女を見つめるばかり。

「おい！！何とか言ったらどうだ！！」

何もしゃべらない犬に罵りの言葉をかける彼女。

それを見て受付の女性はどうしたものかと、溜息を吐く。

「あの、お客様、・・・」

彼女はやっと、目的を思い出したのか手続きを済ませると、犬に捨て台詞を吐いた。

「帰って来た時には・・・覚えているがいい・・・」

受付の女性には、犬が溜息を吐いたように見えたが、きっと見間違いだらうと、自分の仕事に戻った。

クロは図書館の入り口まで出てきてぼやいた。

「まったく・・・人前でしゃべらせる気かねえ・・・あのお嬢様魔王は・・・」

そう言うとその場で丸くなって彼女が出てくるのを待った。

・・・彼女が入ってどれほどの時が流れただろう。

太陽は、空のてっぺんでギラギラと輝いている。その暑苦しさと、クロは目が覚めた。

「まったく・・・まだ出てこねえのか・・・ああ、暑い・・・腹減った・・・」

空腹と暑さを我慢し、クロはギュツと目をつむってもう一度眠り始めた。

クロが二度寝を始めて、かなりの時間が過ぎ、自己主張を激しくしていた太陽も今では西の空に沈もうとしていた。

クロは図書館の前で、簡易屋台が営業し始めたことで漂ってきた良い香りで目が覚めた。

「まだ読んでいるのか！！いったい、いつまで待たせる気なんだ・・・まったく」

・・・

クロが完全に目覚め、屋台が本格的に始まり、太陽は西の空に完全に沈んだ。

しかしそれでもまだ彼女は出て来なかった。

クロはイライラとした様子でその場を行ったり来たりしていた。

クロの腹の虫は、屋台から漂ってくるにおいの刺激を受けさつきから泣きっぱなしだ。

「遅い!!!!何をやってるんだ!!!!」

.....

しばらくして図書館は閉館の時間を迎える。

閉館時間まで図書館にいるものなど、数えるほどだ。

ぽつぽつと、図書館から出てくる者たちの中に混じって、ひとり漆黒の少女が満足げに出てくる。

「おそいぞ!!!!何をそんなに読んでいた!!!!」

クロは腹が減っているせいもあり、イライラを隠そうともせず彼女に詰め寄るが彼女に鼻で笑われ、カチンとくる。

「口のきき方に気をつけるがいい・・・クロよ」

はあ？開口一番この娘は何を言うのかと、クロは目を丸くする。

「分からんか？・・・口のきき方に気を付けるがいい。今後は私を、魔王様とでも呼ぶんだな。」

いつも以上に偉そうでクロを見下した態度をとった彼女に、ずっと待たされたことでだいぶたまっていたクロの鬱憤が爆発する。

「ふざけるな!!!!一体いつまで待たされたと思っている!!!!調子に乗るのもいいかげんにしろ!!!!散々待たせた挙句に、その態度はなんだ!!!!!!」

息もつかずに、怒鳴り散らすクロを彼女は呆然と見つめている。

まさかここまで怒られるとは思ひもなかったのだろう。

「し、しかし、……私の読んだ本の魔王はもっと偉そうだったぞ・
・・」

「本の魔王とお前が同じだと！？ ふん、うぬぼれるのもいいかげんにしろ！！」

そう言い放つと、クロはさっさとその場から立ち上がり、とことくと歩いて行ってしまう。

「ク……クロ……待ってくれ……」

おろおろと彼女はそのあとに続く。

しばらく歩き、元よりこの町に滞在する気も金もないため、クロは町を出ていた。

その後ろを元氣なく、無言でついてくる魔王。
しばらく彼女はクロの機嫌を取り繕おうと、クロに話しかけていたのだが、クロが全く相手にしなかったため、黙り込んでしまった。

いつもからは想像もできないしおれた姿に少しやりすぎたかもしれないと思っていると、不意にかすかな悪魔の靈気をクロは感じ取った。

「何者だ！！」

「……ど、どうしたのだクロ……」

霊気の持ち主を怒鳴り付けるクロ。

すると、薄暗い闇から染み出すように、1匹の魔物が闇より現れる。黒いタキシードを身につけて高貴な雰囲気纏っているが、頭がガイコツのため全てが台無しになっている。クロは現れた魔物に、低い声で威嚇する。

「貴様・・・一体何者だ・・・」

「・・・クロ・・・」

すると先ほどまで黙っていた彼女が何か言いたげな様子で、クロを見つめてくる。

「・・・なんだ?・・・」

緊張を解かず聞き返すクロに、彼女はやっと口を利いてくれたクロに微笑むと、クロに話し始めた。

「クロ・・・あれはな・・・ガイコツというんだ・・・」

「そんなこと言われなくても知ってるわ!!!」

せっかく今日手に入れた知識を、クロに無下に扱われ彼女は拗ねてしまった。

「もういい・・・クロなんて知らないからな・・・」

「なんだと!?!」

もめるクロ達にガイコツ男は、ケタケタと笑い始める。

「くくく・・・なにをもめているか知りませんが、その女性は唯の女性ではありませんね?」

「・・・貴様に言う必要はない・・・」

クロは低い声ですごんで見せるが、ガイコツ男は全く気にせずに続ける。

「貴方は魔物ですよ? なぜその女性に仕えているのか知りませんが・・・その面白そうな女性はもらいますよ」

ガイコツ男がパチンと手を鳴らすと、背後から斧や、槍を持った魔物が現れる。

「・・・やれ・・・」

それを合図にクロと彼女に、魔物達は襲いかかってくる。

「ちっ・・・おい、逃げるぞ!!」

予想外の敵の戦力に撤退することを考えたクロだったが、拗ねた彼女は動こうとしない。

「おい!! なにやっている。」

動かない彼女に、魔物たちは襲いかかり、当然のごとく力のない彼女は簡単に斧で切りつけられてしまった。彼女の、か細い腕からは鮮血が流れる。

「おい！！馬鹿か！！さっさと逃げろ！！」

クロは彼女を襲った魔物を自慢の爪で切り裂く。
耳をつんざくような奇声を上げ、魔物は消えていった。

「全く何をしてるんだ！！逃げるぞ！！」

クロは彼女を引っ張って逃げようとするが、彼女は服の端をくわえたクロを振り払うとそっぽを向く。

「いい加減にしろ！！いつまで拗ねてるつもりだ！！」

「う・・・うるさい！！」

クロに、拗ねてると言われて彼女は頭に血が上ったのか、顔を赤くしながら先ほど倒された魔物が持っていた斧をつかむとクロに振り下ろそうとした。

が・・・斧は彼女に手からすっぽ抜けてあさっての方へと飛んで行った。

「ぎゃあああああああああ」

すると間もなく、ガイコツ男の悲鳴があたりに響く。
彼女の手から抜け落ちた斧が、ガイコツ男の頭を首からすっぽりと切り落としたのだ。

その様子を見た彼の手下らしき魔物は、慌てて逃げ始める。
なんだかよくわからないが、危機は脱したらしい。

クロは大きくため息を吐くと、彼女に文句を言おうとしたが彼女は切り落とされたガイコツ男の首をガン見している。

「な・・・なにやってるんだ？」

「ふん・・・私の読んだ本では、魔物というものは死んだ直後に自分以外の鮮血を与えられると、生き返るものもいるらしいぞ？」

「何の本を読んだんだ・・・ってまさかそれをするとか言い出すんじゃないだろうな？」

「ふふふ・・・魔王は多くの魔物を従えて使役しているそうだ。それに、クロだけでは魔王の護衛は心もとないからな。」

なんだと！！とクロが言う前に彼女は頭蓋骨に自分の腕から流れる血液を、垂らしていた。

しかし、全く動く気配がない。

「ほんとに動くと書いてあったのか？俺はそんなの聞いたことないぞ・・・」

「いや、私が魔王ならば成功するはずだ・・・たぶん・・・」

「たぶんかよ・・・信用できねえな・・・」

しばらく待って見たがガイコツは動かない。

クロはふんと鼻を鳴らす。

「お前やっぱり魔王じゃないんじゃないか？」

「そ、そうなのか？・・・」

「そうだ。なんか変だと思っていたんだよ・・・やっぱりそうか、お前は魔王ではなかったのか・・・喰ってやろう！！！」

「な！！やめろ！！・・・」

クロが彼女に襲いかかろうとした時、全く無音だったガイコツがかりと音を立てたと思うと、そのまま顎を動かしてしゃべりだした。

「な・・・これは一体何事ですか。ワ、ワタシの体がない！！」

その様子を見て彼女は襲いかかってきたクロに拳骨をお見舞いした。

「すみませんでした・・・俺が悪かったです・・・だからもうやめ・・・
・いたいたいたいたい・・・！！！！」

彼女はクロにお座りをさせて、頬の肉をぎゅーっと左右に引き延ばし謝罪を要求する。

「分かったか、クロ。私は魔王なのだ！！」

「はひ・・・わひやりまひた・・・」

「それにしても、魔王とは・・・王族の血は随分前に絶えたと思っていたのですが。」

首だけになったガイコツ男は感心したように彼女を見ている。

「詳しいな・・・何か知っているのか？」

彼女はクロを弄ぶだけ弄ぶと、ガイコツ男に視線を向ける。

「まあこれでも悪魔貴族の端くれですからね、ですがワタシが知っているのは、王族というものが魔物の中にもあったということだけです。王族も一つではなかったようすし、たぶん貴方の知りたような大層な情報は持ち合わせてはおりませんよ・・・それより！！一体どうしてくれるんですか！！この姿で一体どうやって暮らしていけばいいんですか！！」

ガイコツ男は頭だけで器用に、飛び跳ねながら怒っている。

「そんな心配はしなくていいぞ、お前は今日から私の手下2号だ。ちなみに1号はそこにいるクロだ。私が貴様の面倒を見てやる。」

ガイコツ男は遠くで伸びているクロに目を移す。

それについて触れてはいけない気がしたのでガイコツ男は黙っていることにした。

「魔王様の臣下とは名誉なことではありますが、しかしこの姿ではとても役には立ちませんよ？」

それを聞いて彼女は少し考えると、ガイコツ男に少し待っていると言に残すと町の方へかけて行った。

しばらくして、彼女が戻ってくると、どこから手に入れたのか、鉄くずを腕いっぱいに抱えてきた彼女。
ガイコツは怖々と聞く。

「そ・・・それを一体何に・・・」

「決まっているだろう、こうするのだ!!」

そう言うが早いか、ガイコツを押さえつけ彼女は作業へと入る。

「ひ・・・お止めなさい!! ひぎいいやああああ!!!!」

「うるさい!! 暴れるな!!」

ぎちぎちと骨がきしむ音がし、ガイコツ男の悲鳴が辺りにこだました。

しばらくしてクロが目を覚ます。

「んん・・・一体何してんだ?・・・」

「おお!! クロか、見るがいい私の手下2号だ。」

目を向けるとそこには、頭蓋骨へ不自然に鉄でできた足が蜘蛛の様に付けられているガイコツ男の頭があった。

「どうだ？ 良い出来だろう？」

ガイコツ男は、遠い目をしている。クロはなんと言っているのか思いつかなかった。

第三話 王立図書館と悪魔貴族（後書き）

魔王は新たな手下を手に入れた！！

クロがいつの間にか手下1号になっている・・・

第四話 王国ホテル サンマリア

「それよりどうです？もう遅いですし、どこかの旅館にでも泊まってみては？」

ぎこちない動きで、金属的な脚を動かすガイコツ。

しかし、クロは大きくため息をつくとき、ガイコツに論ずる。

「そんな金があると思っているのか!!」

するとガイコツはやれやれといった様子で、魔王である彼女に口を開く。

「魔王様、そこに転がっているワタシの体の服のポケットに袋があるはずなんで出してください。」

彼女は、その言葉に特に反応は見せず、ガイコツの体に近づいてポケットを漁る。

しばらくして、何かがいっぱいに入った茶色い袋を取り出すと彼女は怪訝そうな顔でガイコツに問う。

「なんだこれは？」

ガイコツの答えを待たずに袋を開ける彼女。

そこには丸いきらきら光るものがたくさん入っている。

「それはですねえ、この国の貨幣ですよ。銀に光るものがあるでしょう？それ1枚できつとこの街にある旅館はどこでも一泊できると思いますよ。」

自慢げに語るガイコツ。

鼻はないが、鼻高々といったところだろうか。

しばらくして、彼女達は町へと戻ってきた。

どうせなら一番いい宿に泊まろうということで、巨大な宿場にやってくる。

「おい、部屋に案内しろ。」

彼女は受付に銀貨を置くと、肘をついて受付の対応を待つ。

「しかし・・・お客様、動物はこちらではご遠慮しております。」

事務的に答える受付係に、もう一枚銀貨に加え銅貨を差しだし交渉してみる彼女。

しかし受付係は全く顔色を変えず、ダメだと切って捨てる。

ガン！！！！

しかしその直後、巨大な音が受付に鳴り響く。

受付係の男はその音の原因を見て震えあがることになる。

受付のテーブルに巨大な斧がぐッさりと刺さっていたのだ。

受付の男が恐る恐る彼女に目を向けると、テーブルに頬杖をついてこちらをニコニコとみている。

「ダメか？」

男は、首を高速で横に振って彼女の宿泊を許可した。

「おお、なかなかきれいな部屋ではないか。」

「おい、腹減ったんだが！！！」

魔王御一行は、半ば強引に部屋へ通してもらうと、くつろぎだす。

「おい！！このデカイ穴はなんだ？」

しばらく部屋を歩き回っていた魔王は、部屋でくつろぐ手下2匹に話しかけた。

「ああ、それは風呂というものでございます魔王様。ちょうどいいお入りになればよいのではないですか？」

風呂という単語を聞いて魔王の彼女は思い出したようにつぶやく。

「そう言えば今日読んだ書物に、そんなものが載っていたな。暖かい水につかるのだろうか？」

彼女は自分の体を見て、確かに血やら何やらで汚れている体をきれいにするのもいいかもしれないと風呂場へと向かっていく。

彼女が風呂場に入ったことを確認するとガイコツはおもむろに、ぐったりとしているクロに話しかける。

「1つお聞きしたいのですが、あなたはどうやって彼女と知り合ったのですか？」

「何でそんなことテーマに教えなきゃなんねえんだ・・・」

「良いではないですか・・・それとも無様に敗北したことを話すが恥ずかしいのですかね？あなたには何か面白いまじないが掛けられているようですし・・・もともと彼女の臣下だったわけではないのでしょうか？大方彼女に負けて変なまじないをかけられたんでしょう？」

これを聞いてクロは唸り声を上げる。

「貴様・・・さっきから言わせておけば・・・」

「言わせておけばなんです？行って御覧なさい。イヌコロ。」

その言葉を引き金に、一気に取っ組み合いの争いが始まるのかと思
ったが風呂からあがってきた彼女の一声でその場が荒れることはな
かった。

クロはふんと鼻を鳴らすと、随分と早く風呂を出てきた彼女へ悪態
をつく。

「なぜ邪魔をする！！俺はこいつを今から・・・！！！！」

ふつと目を向けると、そこにはバスタオルを体に巻いただけの何と
も無防備な姿の彼女がいた。

汚れを落とした彼女の肌はいつも以上に美しく、暖かい湯を浴びた
ためか体からは湯気が出て、肌はほのかに色づいている。随分と煽
情的な姿だ。

「おやおや、魔王様・・・この獣には少々刺激が強すぎかと・・・」

彼女は、クロが真っ赤になっているのを見て、にやりと人の悪い笑
みを浮かべると、クロの方へゆっくりと近づく。

「なななな・・・何をしてる！！！！ふふふ服くらい着ろっ！！！！」

「ふふ、どうしたクロ。そんなに真っ赤になって・・・ふふふ、ク
ロ・・・」

彼女は艶のある声を出しながら、逃げるクロを追い詰めていく。

彼女に詰め寄られたことで、クロの鼻に風呂上がり独特のシャンプーの良い香りがする。

いいにおいだなあ・・・と一瞬考えてしまったクロは自分を叱咤して制止の声をかけるが、全く彼女はやめる気配がない。それどころか余計に色付いた声を出して、クロの反応を楽しんでいる。

「・・・クロ・・・」

彼女はとうとうクロを追い詰めると、ぎゅううとクロを抱きしめる。

「ふふん、クロ・・・どうだ、まいったか?・・・」

クロからの返事はない。

「・・・クロ?・・・」

不思議に思った彼女はクロを開放して、様子を見てみる。真っ黒な毛の先端まで赤くして、クロは気絶していた。

「で・・・これからどうする? ガイコツよ。」

服を着た彼女は今後の予定をどうするか、自分の臣下へと相談する。

「お言葉ですが魔王様。ワタシの名前は、レイフォンド・アロン・フロワルドです。死神貴族です！！ガイコツはやめていただきたい！！」

「そうなのか・・・それで、お前ならこれからどうするんだ？ガイコツよ・・・」

・・・ごうん・・・
ガイコツは固まる。

いつの間に目覚めたのか、クロがガイコツに同情の声をかけた。

「慣れる・・・俺は慣れた・・・はず・・・」

彼女は、いつの間にか宿で頼んだ紅茶を優雅に口へとはこぶ。

そんな時部屋の外から何やら男たちの声が聞こえてきたかと思うと、勢いよく彼女たちのいる部屋のドアを開け放ち、5、6人の男たちが入ってくる。

「女！！我々はこの町の守護を任せられし者。お前はここの宿の者を武器で脅して、金も払わず不当にこの宿に泊まっているらしいな。お前はここの町の法を犯した。我々と一緒に来てもらおうか。」

脅したのは間違いないが、それは獣を連れ込むことを許してもらうはずだったのだが・・・受付係が着色でもしたのだろうか。

しかし、部屋に押し掛けてきた男達を気にする様子もなく彼女は紅茶を口に運んでいる。

静かにカップをテーブルへと置くと、ふん、と鼻で男たちを笑う。

「何がおかしい娘！！」

彼女の不可解な行動に怪訝そうな顔をする男達。

「誰に口を聞いている。私こそ、誰もが畏れ敬う大魔王様だぞ。もっと口のきき方に気をつけるがいい。」

彼女の発言に、そこにいた彼女以外の者はあっけにとられた。

「馬鹿たれ!!!! 自分から名乗ってどうする!!!!」

クロは毛を逆立てて、彼女に詰め寄る。

彼女はことの重大さに気付いていないのか不思議そうに首をかしげる。

魔王とばらしてしまったからには、この話を聞いたこの男どもは生かしておけない。

放っておけば、この国の王に伝わり魔王討伐の命が出されるかもしれない。クロは焦った。

「ま・・・魔王だと・・・」

「しゃべる犬・・・魔物だ・・・魔物を使役しているぞ!! あの子が魔王なのか!?!」

男達の間で動揺が走るが、リーダー的存在の男が的確に指示を出す。

「動じるな、お前達はすぐに帰ってこのことを報告しろ!! 私達はここで足止めする!!」

その言葉に、2人はすぐに踵を返して走り出し、残った4人は剣を取り出し身構えてくる。

「・・・クロ・・・何がまずかったんだ？・・・」

男達の様子を見て、彼女は困惑顔でクロを見る。

「誰でも彼でも魔王と聞いてひれ伏すと思うな！！こいつらみたいなものもいるんだぞ。特に人間には気を付けろ！！」

そうだったのか・・・と落ち込む彼女をかばうためクロは剣を構える男達と彼女の間に入る。

しかしそんな緊張した場にのんきな声が響く。

「魔王様、人間ごときに遠慮する必要なんてございません。魔王様はご自分の望むようにすればよいのです。名乗りたければ名乗る。殺したければ殺す。誰も文句は言えませんよ・・・」

そうガイコツがカタカタと顎を鳴らしてしゃべると先程まで殺気を放ちながら剣を構えていた男たちが音もたてず倒れる。

しばらく何が起こったのかわからずクロは呆然としていた。

「な・・・貴様一体何をした！！！」

クロが混乱した頭でガイコツに詰め寄る。

さっきまでぴんぴんしていた相手が急に倒れたのを見たら誰でも混乱するだろう。

「全くうるさいですねえ。私は死神ですよ。人間程度殺すのは訳な

「いのですよ。」

ま、あまり良い殺し方ではありませんでしたけどねえ・・・とぼやくガイコツ。

「それにしても、あなたは今までも魔王様に対してそのような態度だったのですか？ 全く、魔王というものは常に自信にあふれ、気高いものです。人間程度に尻尾を巻いて名乗らないものなど魔王ではありません。あそこで彼女を怒鳴るのは筋違いでしょう？」

クロがそれに応戦しようと口を開きかけたところで彼女が2人を止める。

「また邪魔をするのか!!」

クロは八つ当たり気味で彼女に怒鳴るが、彼女は困った顔でそうではないとかぶりを振る。

「ガイコツが殺したのはここにいる4人だけなのか？ あの2人はどうなった。」

そう言えば・・・とガイコツもクロもそのことを思い出す。

「ガイコツの反応を見る限り、無事なのか・・・」

呆れた顔をした彼女に、ガイコツは苦笑いをする。

いつもはボウッとしていて何を考えているのかわからない彼女だが、こういう所は鋭い。

「おい、骨!! そいつらをさっさと殺せ!! このままではまずいぞ

「!!」

「無理言わないでください!! その二人の顔なんて忘れてしまいましたよ!! 彼等の顔をもう一度見て覚えなければ殺すのは不可能です。」

慌てて怒鳴るクロにガイコツも慌てた様子で答える。

彼女は何かを思案するような顔になり、自分の臣下達に口を開く。

「おそらく、この旅館からだから、そう時間もかからずに城に付くだろう。うかうかしていると援軍が来るぞ。逃げる準備をした方が良さそうだ・・・」

いつもは無表情な彼女も、この時は真剣に悩む真面目な顔をしている。

なんだかそれがおかしくて、クロは笑ってしまった。
それを見て彼女は眉をひそめる。

「・・・何がおかしい・・・」

「いや・・・くくく・・・無表情かニヤニヤ笑ってるだけかと思ったらそんな顔もできるのかと思ったら・・・いたいいたい!!」

「もう一度言ってみるがいい・・・」

額に青筋を浮かべ、口の端を釣り上げ彼女はクロの両頬を千切れんばかりに引っ張った。

第四話 王国ホテル サンマリア（後書き）

タイトルに宿の名前が出てますが本文では出てませんね。
王国ホテルって、帝国ホテルを元ネタにしてみました。

第五話 蘇った魔王

1人の男性を中心に多くの男たちが、長テーブルに座っている。

この中心に座る、物静かな男性はエンジニア王国、第12代目の現国王である。

先代の国王が亡くなり、一人息子である彼が現在の地位を手に入れることになった。

まだ若い、そのぶん柔軟な頭を持ち、臣下達の協力を得ながらより良い国を目指している。

そんな矢先にとある問題が発生した。

これはその問題について話し合うための御前会議なのだ。

「国王陛下、城下の兵士の話では魔王と名乗るものが現れたとか・・・またその物は、サンマリアの宿場にて4人の兵士を殺害した模様。またその犯人と同一と思われる者をアサンテルミンで見たと役人からの報告で分かっております。」

先代の国王の時から臣下の1人である初老の男が鋭い瞳で国王の反応をうかがう。

国王はその報告を受け、大きく息を吐くと、澄んだ声でその臣下に問う。

「魔王がこの世界に現れた時・・・お前はそその言い伝えを覚えているか?・・・」

一瞬その老人は質問の意図が分からず、眉をひそめる。

魔王伝説などこの国中、いや世界の国中で知られている伝説だ。

大人から子供まで、誰でも知っていることだ。

「はい・・・確か世は戦で乱れ、民は死に、辺りに魔物があふれかえると聞きます。」

この後、立ち上がった勇者が魔王を討伐すると続くのだが、初老の男はそこまでは語らなかった。

「我々は持てる力を全て使いそれを防がねばならない。その魔王とやらを探し出すのだ。近隣の国々にも協力の要請を出せ!!」

王のその言葉を持って御前会議は終了した。

1人の男が、王宮の廊下を歩く。

それは先ほどの御前会議での初老の男性。

その男性は宮中の地下に向かう。

この地下は国王さえも知らない、秘密が隠されている。

「おお、しんかんちよう神官長様。お久しぶりでございます。」

初老の男性を見て宗教色の強そうな服を着ている若者が頭を下げる。

「ふむ・・・この間の救世主召喚はどうなった？」

初老の男性は、この若者を一瞥してしばらく前からずっと気になっていたことを問う。

救世主召喚とは太古の昔に行われていた、力のある神官や巫女によって世界の動乱を抑えるものを天より恵んでいただく儀式である。

魔物の侵攻、魔王の襲撃、国家間の戦争などの世の乱れを修正するためにこの儀式を行うと天より救世主と呼ばれるものが与えられる。ある時は、無敵の強さを誇る剣が贈られ、世を跋扈していた魔物どもを払い、ある時は魔法を自在に操る杖が送られ、魔王を倒し、またある時は強大な自然災害で国家間の争いを終結させた。

しかし、とある事件によってその儀式は廃止になってしまう。

とある国の王が私欲を満たそうと神官を使いこの儀式を行ったところ、儀式によって漆黒を纏う娘が現れ、国も王も神官も全てをその少女に滅ぼされてしまったのだ。

この出来事があったことで世界の神官達はこのことを天の怒りと捉え、二度とその儀式を行わなくなってしまうたのである。

「それが・・・漆黒をまとった娘が現れた様で・・・そこにいた神官達は突然の魔物の襲撃に会い、皆殺しに・・・」

若者の答えに初老の男性は顔をしかめる。

彼は、この儀式をもう一度復活させようと考えていた。救世主を呼び、自己の欲望をかなえてもらうために。

彼は、この事故を間拔けな国王の引き起こした喜劇であると考えている。

その国王は、儀式で現れた漆黒の女を救世主と勘違いし、両手を上げて喜んでいたところを殺され、拳句の果てに自らの国まで滅ぼさ

れたと・・・とんだ笑い話だ。

もっと呼び寄せたその少女に注意を置いておけばこんな結果にはならなかったのかもしれない。もちろん彼にはそうならない自信があった。

実際に、当時儀式の禁止には反対する神官も少なくなかったのだ。

彼は、これらの神官の子孫に話を持ちかけ【清教徒団】と呼ばれる組織を設立した。

そして彼は自分に従わない世界中の神官を長い年月をかけて駆逐し、とうとう自分と同じように儀式を復活させるべきだと考える神官や巫女だけを世界に残すことに成功した。

彼はこの清教徒団の力を陰で使い、表では自分の高い交渉術などを駆使して、11代国王の側近にまで出世し、そして表では国王に従うふりをしながら着々と儀式の準備をしてきた。

それは気付かれること無く、今では良い臣下という評判が広がり11代目国王の息子つまり現国王のご意見番のような存在にもなった。

「ふふふ・・・現在ちまたでは魔王騒ぎがあるらしい。その魔王とやらをこの儀式で呼んでしまった漆黒の女にしてしまうのはどうだ？あの坊ちゃん国王も魔王とやらを捕まえる気満々の様だしな。」

初老の男の言葉にやりと若者は笑うとその場から消える。

初老の男は微笑んだ。明日にはきつと国中にこんな手配書が出るだろう。

《魔王は漆黒の髪を持つ、黒い眼の黒服の女性！！見つけたものには王国より謝礼が払われる！！ぜひ諸君の協力を求む！！》

城下町ロンダリスを抜け出して東に進み、エンジニア王国領ラファランドルにやってきた魔王御一行。

「うう・・・腹減った・・・」

「そうだな・・・クロ。私も何か食べたい。」

急いで逃げてきたため、空きっ腹なのである。

「いやはや、めんどくさいですね・・・ワタシなんか食事をとらなくても全然困らないのに・・・おや？」

金属的な脚の生えた頭蓋骨が2人を小馬鹿にしたように笑うが、町のある一角に人だかりができていることに疑問を抱く。

「あそこ何かあるんでしょうかね？」

ガイコツは人だかりに興味を示したが、対して彼女とクロはそんな些細な出来事より自分の食欲を満たすことを最優先するためにきよろきよろとあたりを見回している。

「もしかしたら、とんでもなく人気のお店があるのかもしれない

よ？久しぶりの食事はおいしいほうがよいでしょう？」

ガイコツは巧みに2人の興味を人だかりへと向けさせようとする。

「ふむ・・・確かにそうだな・・・行ってみよう」

「俺は早く食えるところが良いんだけどなあ・・・」

反応はまちまちだが、人だかりの方へ行くことにした彼女達。
ガイコツは内心ほくそ笑む。

人だかりへと向かうと、何やら大勢でざわめいている。
人が多すぎて前の様子が見えないため彼女は近くの男性に事情を聞く。

しかし男性も興奮しているのか、何やら的を得ない答えだ。

「人探しの知らせらしいんだ、なんだか見つけたものには大金が出るらしいけど・・・」

男性は先ほどからその人探しの看板を見ていたようだが、ふと彼女に視線を向けた。

すると顔を青ざめ口をパクパクとさせ、声にならない悲鳴を上げる。

「おい・・・どうした？」

彼女はそんな男性の様子を怪訝そうに眺めてから、たくさんの人の隙間から看板を眺める。

直後彼女は、それを見て思わず目を見開いてしまった。
そこに書かれていたものは・・・

「いたぞおおおお!!!!」

青ざめた彼女の耳に先ほどの男性の声が響いた。

第五話 蘇った魔王（後書き）

作者は文を時間をかけないで書くのでどうしても雑になってしまいます。

時間をかけて書こうにも書いてる途中で何が書きたかったのか忘れる始末。

まあ・・・どっちにしろダメなんですよ・・・

第六話 エンジンア王国からの脱出

男の叫び声で、看板を見ていた村人の視線が彼女へと集まる。

皆の目は驚愕で見開かれているが、宝を見つけたかのような何とも言えない感情を目の奥に潜めている。

「つかまえろ!!!」

誰かがそう叫んだのを合図に彼女へと襲いかかる村人達。

彼女は眉をひそめると、いつの間にか自分の頭の上に這い上がってきていたガイコツに命令を下す。

「なんとかしろ」

彼女はそう言うか言わないかのうちに迫ってきていた村人から逃げるために走り出した。

ガイコツはそんな彼女の上で大きくあくびをすると彼女に口を開く。

「無理ですね。この前の様な事をしてはワタシの品格が疑われます。ワタシは現段階では解決する方法を持っていません。ですがあなたならその方法を持っているではないですか。」

その言葉に彼女は顔をしかめる。

「私の命令が聞けないというのか？」

ガイコツは答えようとしない。

彼女は大きくため息を吐くと、追ってくる村人達に向かいあった。

「クロ！！準備はいいか？」

「ああ、大丈夫だ。」

彼女はクロから斧を受け取り、村人たちが射程圏内に入るのを待つ。一方クロは背負っていた斧を彼女に渡すと村人達の方へ走って行った。

「うわああ！！なんだこの犬！！」

いきなりの黒い犬の登場で村人達は混乱するが彼女を捕まえるために、手を伸ばす。

彼女はその手をひらりとかわすと、持っていた斧で彼女を捕まえようと躍起になっている村人の頭に振り下ろした。

何かが潰れたように嫌な音がして村人の頭からは真っ赤な液体が噴き出す。

その村人は体を痙攣させながら倒れた。

その様子を目の当たりにした村人は今度は打って変わって、悲鳴を上げながら彼女から逃げ始める。

「ふふ、小娘一人なら楽に捕まえられなくても思ったのか？」

彼女は人の悪い笑みを浮かべると、仮にも私は魔王だぞ！！と逃げ惑う村人に言い放つ。誰も聞いていないが・・・

そんな時、村人の中から屈強そうな男集団が野太い声を張り上げ、出てくる。

「おいおい、魔王つっても小娘だろうが！！何ビビってやがる・・・

」

男達は手に農具を持ち、ニヤニヤと笑いながら彼女へと近づいてくる。

「殺せ!!」

リーダーなのかはわからないが、1人の男が指示を出すと男達は持っていた農具を彼女へと振り下ろす。

彼女はそれをかわすし、何かを1人の男へと投げつける。

「わっ!!なんだ!!」

投げられた何かは、男の顔に張り付くと金属的な脚で男の眼球をえぐる。

男は悲鳴を上げてそこに倒れこむが、それで終わりではない。

彼女の振り上げた斧が男の頭に振り下ろされる。

「ぐひやははははは、コレですよ、ワタシの求めていたのは。あー楽しい。」

ガイコツは嬉しさから狂ったようにびよんぴよんと辺りを跳ねまわる。

男達はたじろぐがリーダー格は口の弧をさらに深めると、彼女へと襲いかかってくる。

あまりにも単調だったそれを彼女が避けるにはそう難しくなかった。

しかし彼女がリーダー格の攻撃を避けた直後彼女の腕に激痛が走り、思わず彼女は顔をしかめる。

彼女の死角から、もう1人の男が鍬を彼女の腕につきたてていたのだ。

あまりの痛さに彼女は持っていた斧を落としてしまった。
そんな好機を男が見逃すわけもなく、残った者全員で彼女に襲いかかる。

が、あたりに男達の悲鳴が響き彼女への攻撃は起こらなかった。
クロが素早い身のこなしで、残る男達の喉に噛みつき絶命させたからだ。

その様子に身の危険を感じたりリーダー格は襲われる手下を見捨てて逃げだそうとしたが、ふと意識を失って倒れそのまま絶命してしまった。

「まったく、この殺し方は嫌だったんですけどねえ・・・」

ガイコツ男は溜息を吐き、腕を押さえて苦痛の表情を浮かべる彼女の元へと向かう。

村人たちは去り、男達も皆絶命したのでひとまず安心といったところか。

「あらら、前の傷口が開いちゃってるじゃないですか。」

ガイコツは傷口を見るとのんきにそんな声を上げる。

以前彼女が腕に負った傷は大したことがなかったので治りかけてい

ただが、今回のせいで傷が開き、また新しくつけられた傷によって以前より傷口が深くなっている。

「骨の手下が傷付けたのと同じところじゃないか!!」

クロは彼女の傷口を見るとがっかりガイコツをくわえて尋問する。

「なぜお前の能力を使わなかったんだ?・・・お前のせいで作らなくていい傷を作ってしまったではないか!!」

ガイコツは素早くクロの口をこじ開けて這い出ると、全く悪びれた様子もなくクロに答える。

「あの殺し方は私のポリシーに反するんですよ。どうせ殺すなら鮮血を舞わせるような美しいものがないじゃありませんか。」

クロがなお食い下がろうとするのを見て、ガイコツは溜息を吐く。

「何でもいいですが、早く包帯と傷薬をどっかから持ってきたさいな。このままでは魔王様が衰弱してしまいますよ?」

クロはちらりと彼女を見る。

だらだらと血が流れる傷口を押さえている姿が痛々しい。

クロはふんと鼻を鳴らすと薬屋から必要なものをかっぱらうために走って行った。

クロが薬屋から奪い取ってきた包帯やら何やらを使って一応血が止まる。

ほっと息をついてクロは彼女に口を開く。

「もうこの国にはいない方がいいな。どうやら魔王討伐の命が出たらしい。幸いここはエンジニア王国のはずれにある地域だ。しばらく歩けば国を出られるだろう。」

クロの提案にガイコツ男も賛同する。

「この国を出ればとりあえず一時的には安心でしょう。まあ急がないと他国にもこの情報が渡ってしまいますがね・・・」

こうして彼女達はエンジニア王国を後にすることにした。

「それにしても・・・」

先程の町を離れしばらく歩いた時彼女が口を開いた。
クロはどうかしたのかと彼女の顔を見る。彼女はクロと目を合わせると言葉を続ける。

「私の臣下は心もとないと思ってな。私の読んだ本では魔王を守る臣下はもっと優秀だと思ったのだが・・・」

それを聞いてクロは鼻を鳴らし、そっぽを向く。
彼女を図書館に連れて行ったのは失敗だった。余計なことばかり覚えてしまったようだ。

「やはり私ももっと臣下を持つべきだろうか？」

そのつぶやきにずうずうしくクロの頭の上に乗っかっていたガイコツが答える。

「それは良いですね。もっと力の強い者たちを集めれば魔王様に襲いかかってくるような人間どももいなくなるでしょう。まったく人間は貧弱なくせに群れると強気になりますからねえ」

ガイコツの答えに彼女は頷くと、また口を開く。

「そうだな、私にふさわしく強い臣下を探すでしょう。そして人間どもを懲らしめてくれる!!」

おー、と掛け声をあげるガイコツ。

クロは乗せられやすい彼女を見て溜息を吐くがふと思う。

臣下集めをするのは勝手だが、彼女を魔王と信じてない魔族もいるだろう。

そんな魔物から彼女を守らなければいけないのか、人間だけで手いっぱいだというのに。

ガイコツはいまいち信用できない。とするといざというときは彼女を守るのは自分一人だけという訳だ。それってかなり面倒ではないか・・・

彼女を守るためには、危険なことは極力避けたい。クロは抗議の声を上げる。

「待て！！そんな簡単にいくか！！第一お前を魔王と信じる奴の方が少ないと思うぞ！！力もないのにそんな危険なことをする奴があるか！！」

クロの発言により彼女は目を細めてクロを鋭く見つめる。

「ほう、私の命令が聞けないと・・・そう言うのか？」

氷のように冷たい声でクロに答を求める彼女。

そんな彼女をガイコツはなだめる。

「まあまあ・・・この獣はきっと魔王様を危険な目に会わせたくないのですよ。」

それを聞いた彼女は意外だったのかちよつとびっくりした顔になり、その後何か思いついたのか、にやりと笑う。

「ほう、つまりクロは私のことが心配で心配でしようがないのだな？」

その物の言い方にクロは慌てる。

「ちっ・・違う!!! これは、あれだ!!! このまじないを解いても
らうのに死なれては困るからだ!!!」

キャンキャンと喚くクロを彼女は見下ろす。

「ふふ・・わかっているぞ、そんなに照れなくてもよい、クロ・・」

わかってなあああああああい!!!

とクロの叫びがこだまする。

第六話 エンジンニア王国からの脱出（後書き）

エンジンニア王国編？終了かな・・・？

第七話 耳長族

「ふん、では我が臣下達よ、この辺りに潜む魔物を手当たり次第連れてくるのだ。」

エンジニア王国では自国から魔王を出さないようにするため、警備を強めていたが、嫌がるガイコツに能力を無理やり使わせて楽々とエンジニア王国を出国することができた魔王御一行。

「ちょっと待て！！お前はその間何をするつもりなんだ？」

不服なのかクロが彼女に問いたです。

彼女はさも当たり前のようにクロの問いに答えた。

「ここで休んでいるに決まっておろうが」

何か問題があるのか？とでも言いたげな彼女に、大ありだ！！とクロは怒鳴る。

そんなクロの言葉を聞き流し彼女はさっさと行けと言わんばかりに手をひらひらとさせる。

クロは体を震わせ怒りを必死で抑えようとした時、クロの頭でだらけていたガイコツが口を開いた。

「魔王様。この仕事でより実績のあるものを魔王様の一番の臣下にするというのはどうでしょう？臣下が増えた時にまとめるものが魔王様だけでは大変でございましょう？」

しばらく考えて、彼女はそれもそうだとガイコツの考えに賛同する。それを見てガイコツはぼそりとクロに呟く。

「さあ獣、とうとうワタシがあなたの上司になる時が来たようですね」

その言葉にクロはそっくりそのままお前に返してやる！！と叫びガイコツを頭に乗せたまま、森の奥へ進んでいった。

その様子を確認した彼女は近くにある木に寄りかかり、目を閉じた。

森が風に揺られる音が聞こえる。

そんな音を聞いて彼女が和んでいると、どこからか幼い子供の泣き声が聞こえてきた。

彼女は閉じていた目をうつすらと開けてから辺りをめんどくさそうに見渡す。

と、ガサガサと草むらが揺れたかと思うと1人の少年が泣きながら出てきた。

彼女は少年を見て顔をしかめると少年へと口を開く。

「うるさいぞ、黙らんか。」

彼女は眉を吊り上げてぎろりと少年を睨む。

しかし少年は、さっきよりも声をあげて泣きはじめてしまった。

どうしたものかと考えているとふと彼女の頭に一つの言葉が浮かぶ。確かその言葉を知ったのは図書館でのことだ。

とある本にこんなことわざがのっていたのだ。

『汝、物事を解決させたければその根源を解決すべし。』

つまり・・・と彼女は考える。

今、彼女が困っているのは静かに物思いにふけるのを邪魔するこの

少年の泣き声。

少年の泣き声の根源はこの少年・・・

イコールこの少年が泣きやめば問題解決、イコールこの少年が死ねば問題解決。

一般常識からかけ離れた彼女の頭の中で数式が出来上がり、彼女はそばにあった斧を手にとると泣きわめく少年に振り下ろそうとする。がいつの間にか小さな少年が近くまで寄ってきてぴったりと彼女にくっついていたため斧を振りおろしたのは何もない地面であった。

「くっつくな!!」

べりっと音がしそうな勢いで少年を引きはがす彼女。

少年は潤んだ瞳で少女を見上げる。

少年に抱きつかれて皺になった服を伸ばしながら、彼女は少年に尋ねる。

「お前は誰だ？ここで何をしている？」

そんな問いに少年はまだぐずぐずとしていたが、少ししてから小さな声で彼女に答える。

「マルクっていうの、おねーちゃんは？」

彼女は大きくため息を吐くと少年の頭を軽くなでる。

「私のことはいい。お前がここで何をしていたのかと聞いている。」

少年はごしごしと自分の涙をふくと先ほどとは打って変わって強気な声を出す。

「こどもあつかいするなよ!! ぼくはもう5歳だぞ!!」

そう言って少年は彼女の手を払う。

しかし彼女は払われた手を素早く少年の頭に戻すと、今度はがっしりとつかんで力を込めた。

「ふふ、早く何をしていたのか答えないと頭が握り潰されてしまうぞ?」

実際彼女の握力では無理なのだが少年は真っ青な顔をして暴れだす。

「や、やめろよ!!」

いったんは涙の止まった目にまたじんわりと涙がたまる。

そんな様子がおかしくて彼女はクスクスと笑ってしまった。

「ふふふ、面白い奴だな。確か・・・マルクとかいったか。お前ひとりでこの森に来たのか?」

その彼女に拗ねたような顔をしたマルクは答えた。

「そうだよ、ここにいる魔獣を倒しに来たの。」

その言葉を聞いてかすかに驚いた様子の彼女だったが、いつもクロを弄ぶ時の様に口元に笑みを浮かべる。

「そうか、その魔獣がいる場所は知っているのか?」

「うん確かこのあたりだってお父さんが言ってた。だからホントは危ないから行っちゃだめなんだって」

彼女は彼の答えを聞くと地面に突き刺してあった斧を手取る。
それを見ていたマルクは慌てて彼女を止める。

「ぼ、ぼくひとりで倒すんだからね!! sonunda みんなに自慢するんだから、邪魔しないでよ!!」

彼女は必死に訴えてくるマルクの様子を見て、持っていた斧を離し溜息をつく。

それに安心したのかマルクは胸を張って彼女にこういった。

「おねーちゃんのこと僕が守ってあげるよ!!」

彼女はそうか、と答えると少年が現れる前の時の様に木に寄りかかって目を閉じた。

マルクはしばらく彼女の様子をうかがっていたが退屈なのかその辺で一人遊びを始めた。

しばらくしただろうか、ガサガサと音がしたと思うとクロ達が戻ってきた。

行く前と何も変わっていないので何の収穫もなかったのだろう。

マルクはクロを見て、顔を青ざめていたが彼女に大丈夫だと伝えられると安心したのかまた一人遊びを始める。

彼女はマルクが遠ざかったのを確認してクロ達に小声で話す。

「魔物はどうしたのだ?」

「それが、このあたりに魔物は居ないようでございます。」

彼女の問いにガイコツはそう答え、全くとんだ時間の無駄だったと溜息を吐く。

つまりはマルクの言っていた魔獣は唯の言い伝えの様なものか。

・・・とんだ期待外れだったな・・・

と彼女は、つぶやくところにはもう用はないといった様子で出発する準備を始める。

マルクはそれに気が付いて不安そうな様子で彼女に尋ねる。

「もういっちゃうの？」

「ああ、マルコ、お前も遅くならないうちに家に帰るのだぞ。」

彼女の言葉にマルクはこども扱いするな！！と頬を膨らませて、拗ねてしまった。

彼女はマルクの頭をひとなでするとそのまま歩きだす。

背後からマルクのじゃーねー！！という声を聞いて彼女はクスリと笑った。

しばらく歩いていると、クロが不意に口を開く。

「そういえば、あの餓鬼、エルフ族のものだったな。」

クロの言葉を聞いて彼女は首をかしげる。

「エルフ？何だそれは？」

彼女は図書館で得た知識を探るがあいにくエルフは出てこなかった。

「耳が人間よりも大きかっただろう？子供の時はそうでもないが・
・エルフというのは、耳が人間より尖っているのだ。」

確かに言われてみれば、尖っていたような気もする。

彼女はふうんと相槌をうつて、視線を先程の森へと移す。

もうずいぶんと小さくなったそれはざわざわと風に吹かれて揺れている。

そんな時ガイコツが思い出したかのようにカタカタとしゃべりだす。

「蔑称、耳長族。確か人間達がそう呼んでましたねえ。そういえばこのあたりは、人間に追われて逃げてきたエルフたちが作った集落の様なものがあるんでしたっけね。まあ興味もないですからどこにあるか忘れましたが・・・どうします魔王様？集落を探してエルフどもをとっ捕まえて奴隷にでも使いますか？」

けたけたと笑うガイコツの言葉に彼女は、やっと思い出したという顔をする。

「耳長族という言葉なら私も知っているぞ。確か人間よりも長寿で屈強で賢い種族だとあったな。しかし確かあやつらは魔王を恨んでいるのではないか？」

そう尋ねる彼女にガイコツはカチカチと顎を鳴らして答える。

「そんなこと関係ありませんよ。奴隷に使えばいいのですから。きつと楽しいですよ？」

クロの上ではしゃぐガイコツを見て彼女は口から笑みをこぼす。

「ふふん、私が弄ぶのはクロだけで十分だ。」

なんだと！！と睨みつけてきたクロを彼女は華麗に無視した。

マルクは彼女達の向かった先をしばらく眺めていた。
しばらくして予想以上に空が暗くなっているのに気付き、慌てて森を出ようとする。

が、突如マルクは足を掴まれて転倒してしまった。
振り向くとそこにはむさくるしい格好をした男達が数人。
彼らは俗に言う所の追剥。マルクを見て下品に笑う。

「おい！！こいつは上玉じゃねえか？奴隷商に売れば金がたんまりだぜ。」

そんな男達から逃れようとマルクは暴れるが、追剥に強く後頭部を殴られそのまま気絶してしまった。

追剥は高笑いし、マルクを乱暴に袋に詰めると奴隷商のある町へと向かっていく。

つまり、彼の父親が言っていた魔獣というのは追剥のことで彼らの縄張りであるこの森に入ってはいけないという注意だったのである。
『耳長族、それは人間に奴隷にされたエルフの呼び名である。』

第七話 耳長族（後書き）

あってもなくてもいい話でしたが何となく入れてみました。
魔王の思考回路がクロやガイコツの影響でだいぶおかしいですが気にしない。

第八話 博打の後の奴隸市

エンジニア王国と森を挟んで隣接する大国ハンニ帝国。

軍事力は周辺国の約2倍。武力に物を言わせて自国の言い分を他国にこり押しする傾向がある。そんな国の、とある場所にむさくるしい男集団がやってきた。そんな男達を1人の商人が出迎える。

「いらっしやいませ。本日はどのような御用で？」

「ああ、今日はいいつを売りに来たんだ。なかなかの上物だぜえ？」

「おお、金が増えたぞ！！！！どういうことだ？」

数日かけて、ハンニ帝国へとやってきた魔王御一行。入国手続きの際に貨幣をハンニ帝国の物に両替したことで増えたこれらに、黒髪黒服の彼女が驚嘆の声を上げる。それに対し、気味の悪い金属的な脚を蠢かしながら頭蓋骨が口を開く。

「このハンニ帝国の貨幣はエンジニア王国の貨幣とは違いますからね。エンジニア王国の貨幣はハルビン。ハンニ帝国の貨幣はブロンという単位なのですよ。1ハルビンにつき30ブロンですから量は増えますけど、この国で払う額も増えますからね？」

「・・・そうなのか・・・」

ガイコツの言葉を聞いてしょぼーんと元気をなくす彼女。

そんな彼女にどこから来たのかニヤニヤした1人の男が声をかける。

「お嬢さん、うちの店によって行きませんか？」

彼女が答えるのを待たずに男はニヤニヤと笑いながら彼女を店のあ
る方へとどんどん引っ張って行く。

「お、おい！！ちょ・・・どこに行くつもりだ・・・」

しばらく引っ張ってこられて着いた場所は装飾が、きらびやかとい
うよりゴテゴテしている店。彼女は男の手を振り払うと男に尋ねる。

「なんだこの店は・・・」

「ここはですねえ、遊んで金が楽に手に入る店ですよ。まだこの国
に来たばかりでしょう？ここで稼いでいったらどうです？」

男はそう言うのと店の中に彼女を押し込めた。

後をつけていたクロは中に入れずに、扉の前で待つことになり、グ
ルグルとその場を回ってそのままその場で座る。

「まったく・・・こんな店に入るとは、無一文になるのはごめんだ
ぞ・・・」

クロは店の中へと入って行った彼女に文句を言った。

一方店に入った彼女は不愉快そうにあたりを見渡す。

様々な賭け事をしながら、下品に笑ったり怒鳴ったりしている者達がいる。

彼らは新しい客である彼女を見ると、小馬鹿にしたように鼻で笑ってきた。

「おいおい、お嬢ちゃんにはまだ早いぜえ？」

「なかなかいい女じゃねえか。どうだい？俺が遊んでやるぜ？」

男達の声を軽く無視して彼女は自分を連れてきた男を見やる。相変わらず、ニヤニヤして何を考えているかわからない男だ。

「で、このまま帰す気はないのだろう？私は何をすればいいんだ？」

彼女がそう口を開くと、彼女を連れてきた男はニヤニヤしたまま答える。

「では、トランプゲームでもしてもらいましょうか。」

男がそう言うのと周りで見ていた男達の中の数人が自分も参加すると1つのテーブルに座る。

「……ガイコツ……」

「んん？何か言ったかい、嬢ちゃん？」

「いや、なんでもない。」

彼女が小さな声で何かを呟いたのを聞いて1人の男が不思議そうな

顔をするが彼女はかぶりを振って自分を連れてきたニヤニヤと笑う男にさっさとカードを配るように促す。それを見て相変わらずニヤニヤとしている男がカードを配り始めた。恐ろしい博打の遊びの始まりである。

クロはしばらく彼女の入って行った店を見上げていたが、何やら道行く人がざわめきだしたのを見て、その原因になっていると思われる人ばかりへと歩を進める。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。今回は商品にお好きな値段をつけていただきまして、言い値が一番高かった方へ商品をお売りいたしましたしょう。」

ガヤガヤとした人の声の中、よく通るの声で商人が叫ぶとより一層、ざわめく人々。

そんな中、はじめの商品が運ばれてきた。その商品を見てクロは面白い物を見つけた時のような顔をする。

「奴隷市か、面白いもんだな。」

異種族や貧困層の人間を奴隷という商品として、売買することがこの奴隷市であり一部の貴族や金持ちには重宝される。エンジニア王国では原則、奴隷市を禁止しているが、ハンニ帝国では特にそうい

った規制はかかっていないらしい。
市に集まった人達が皆、値段を商人に叫ぶ。しばらくして、一番高い値段を付けた者が奴隷を落札した。
そしてまた新しい商品が運ばれてくる。また騒がしく値段を客が言い合い、一番高い値段の者が落札する。この繰り返しをクロはしばらく静かに見ていた。

「ふざけんじゃねえ!! こんなのはイカサマだ!!」

テーブルを囲っていた男の1人が声を荒げる。

彼女を連れてきたニヤニヤとしていた男も今では顔を真っ青とさせている。

「ほう、では証拠はあるのか？」

怒鳴る男を全く気にする様子もなく、彼女は男を鼻で笑う。
そんな彼女に男はさらに怒り彼女に殴りかかろうとするが、それより素早く彼女が繰り出した蹴りが男の股間に襲いかかった。

「・・・!!!!・・・」

声も上げられずに悶え狂う男を彼女は冷笑し、イスから立ち上がる。

「ふん、ではこの賭け金はもらっていくぞ。」

皆が呆然とする中彼女は悠々と店を後にする。

店を出た直後彼女の背後にへばりついていたガイコツが笑い声を上げた。

「いやあ、ぼろ儲けでしたねえ・・・それにしても私の存在に気付かないとはあの男達も間抜けですよね。」

「ふふん、如何様など明らかにならないなら存在しないのだ。」

それもそうですねえ、とガイコツがカタカタと音をたてて笑っていると、なにやら人が集まっている一角がある。それに少し興味を持った彼女はその場所へと向かっていく。

「これは、奴隷市の様ですね。」

ガイコツのつぶやきに彼女は首をかしげる。

「奴隷というのは金を出して買うものなのか？自分で捕まえるのかと思っていたのだが・・・」

彼女が市に視線を向けると商人と思しき男が口を開いた。

「では、本日最後の商品です。今回は耳長族の子供です。労働には適しませんが、なかなか美形な商品です。では50銀ブロンから始めさせていただきますと思います。」

商人の言葉で周りの客は値段を付けていく。

彼女はごそそと自分の持っていた袋をあさって中身を見やる。

「銀ブロンとはこれか？」

「いえいえ、それは金ブロンです。銀ブロンよりも価値がありますよ。」

彼女は袋から一枚取り出すとそれを眺めている。

その間にも、奴隷に付けられていく値段は高くなっていく。

彼女は手に取っていた金貨を戻すと、市の奴隷に目を向ける。

と、しばらくして彼女はその奴隷の顔に見覚えがあることに気付き、そしてその奴隷が誰か気付いた彼女は驚きのあまり動作が止まる。

「なんであいつがここにいるんだ？」

クロは最後の商品の奴隷が連れてこられた時にそう呟いた。

それは以前森の中でちらりと見たエルフ族の子供に大変よく似ていた。というかたぶん本人であろう。

「奴隷狩りにでもあったのか？間拔けな奴め。」

クロは手錠をかけられ立たされているエルフを見ながら大きく溜息を吐いた。

「200!!」

「250!!」

50銀ブロンから始まったそれはすでに200銀ブロンを超えていた。

クロはそろそろ彼女達が店から出てくるだろうと踵を返す。

「250以上のお客様は居らっしゃいませんか？」

商人の確認の声が聞こえる。

そんな時クロの耳に一つの声が聞こえた。

「・・・1・・・」

「はい？」

最初商人は訳が分からないといったような戸惑いの声を出す、そのあとの言葉でその意味を理解し驚愕する。

「1金ブロンだ。」

第八話 博打の後の奴隸市（後書き）

この世界の貨幣の価値は、

銅貨＜銀貨＜金貨

で一応万国共通ということになっています。

第九話 下僕採集

「1金ブロンだ」

彼女の声に辺りは一瞬静まり返るが、その直後どっと歓声が沸き上がる。

クロはその声の主の元へ呆れた様子で近づいていく。

「な、なんとおお!! 1金ブロン!! ら、落札です!!」

司会をしていた商人も驚きを隠せないのか、声が裏返っている。

「おい!! 一体どういうつもりだ!？」

興奮して騒いでいる人々を潜り抜け、クロは彼女のもとへ到着すると抗議の声を上げた。するとガイコツがなだめるようにクロに答える。

「まあ、落ち着きなさい。金貨の一枚くらいどうってことないぐらい稼いできましたからね、」

「ふん、まあそういうことだ。下僕は多いに越したことはあるまい?」

訳のわからないといった表情のクロに、彼女は勝ち誇るかの様子で博打で稼いできた金を見せる。クロはその貨幣の量に目を見開く。

「魔王の手にかかればこのぐらいということはない。」

奴隸市は大喝采の中、幕を閉じた。

しばらくして、支払いを済ませた彼女の元に落札した奴隸が連れられてくる。

腕が鎖で拘束され、首輪が付けられて無理やり引っ張ってこられる様子は何とも痛々しい。しかし、その奴隸は彼女の顔を見ると彼女の元にすがりつくようにへばりついてきた。

「おや？この商品と面識がおありなんですか？」

金貨を受け取りニコニコ顔の奴隸商人がその様子に首をかしげる。

「別がないぞ。それより、この腕の拘束は必要ないから取ってしまつて構わん。」

彼女は特に商人の問いに興味もないようにさらりと受け流し、商人に腕の拘束を解かせるとその後首輪から延びる紐を彼女は手に取ると「今後どうぞ御贔屓に」という商人の言葉を背にその場を立ち去る。

「おい、いつまで私にへばりついている。さっさと離れろ。」

彼女はさっきからへばりついて離れない奴隸に不愉快そうな声を出す。

するとその奴隸は、半泣き状態の顔で彼女を見上げて口を開く。

「あの時のお姉ちゃんだよね・・・助けに来てくれたんじゃないの？」

奴隷の問いに彼女は鼻で笑い、少年の首輪の紐をグイッと引っ張って少年の顔を自分の顔へと近づける。

「・・・勘違いするな・・・今日から私は貴様の主だ。言葉使いに気を付けろ・・・」

「僕だよ！！マルクだよ！！覚えてないの！？」

なおも食い下がる奴隷に彼女は呆れた顔をして、少年を乱暴に地面へと落とした。

せき込む奴隷を彼女は無表情に見下ろし、大きくため息を吐く。

「・・・少し折檻が必要なようだ・・・」

そう言うとき彼女はおもむろに斧を取り出し、少年へと振り下ろそうとした。

刹那、彼女の背後から音もなく表れたフードをかぶった者が彼女へと襲いかかり反撃する間もなく後頭部に強烈な一撃を打ち込まれて彼女はよろよろと前に倒れかかって、寸での所で膝をつく。

朦朧とする意識の中で、彼女はいきなり現れた謎の人物を睨みつける。

「・・・いきなり何の用だ？」

彼女の問いには答えずにフードをかぶった者は、さらに追い打ちをかけるためか彼女の方へと近寄ってくる。

それを許すほどクロは間抜けではない。

「・・・貴様、何者だ・・・こいつの頭は常識はずれなのだぞ？殴って余計変になったらどうする！？」

低いどすの利いた声なのにいまち迫力に欠けるクロの言葉に彼女はけっこうショックだったのか膝をついていた体がつくりと倒れてしまった。

クロを見て、予想外の魔物の登場に驚いた様子でフードをかぶった何者かは彼女の落札した奴隷を抱えるとそのまま踵を返して走り出した。

「逃がすか馬鹿め！！」

クロは自慢の瞬発力で、追いつくとフードの何者かに襲いかかる。

「うわあああああああ！！！！」

クロに襲われたことでフードがはぎ取られ、彼女を襲った何者かの正体が明らかになる。それは若いエルフ族の女性であった。

「なんだ、弱っちいと思ったらエルフ族だったのか・・・一体どういうつもりだ？」

クロはフードをかぶった者の正体が人間でも魔物でもなかったこと

に少々拍子抜けの様子で、未だ緊張を解かず逃げる隙を窺っているエルフ族の女性に問う。その問いにエルフ族の女性はぶっきらぼうにだが答えた。

「わ、私はただ同族が奴隷にされるのが許せなかったただけだ・・・」

クロはあまり興味もないようでエルフ族の女性の答えに適当に相槌を打ったが、逆にフードをかぶっていた者の正体がエルフだったということに興味を持ったのか、それまで不干渉を貫いていたガイコツが突然口を開いた。

「つまり、貴方は奴隷市で買い取られたそのエルフ族の子供を解放するために我々の後を付けていたということですね・・・魔王様どうします？」

ガイコツはいつの間にか起きてきた自分の主である魔王の彼女に目を向けた。

まだ痛むのか彼女は頭をさすりながら不愉快そうに眉を寄せている。

「どうもこうもない・・・私の下僕を返してもらおう。」

彼女はそう言うと言った奴隷へと手を伸ばすが、それをエルフ族の女性によって阻まれ、彼女は女性エルフを睨みつける。

しかしそれを気にせずにエルフ族の女性は彼女に疑問をぶつける。

「魔王だと！！・・・一体どういうことだ！？」

彼女達の会話の内容が理解できないのか混乱しているエルフの女性にイライラが限界に達したのかしばらく黙って様子を見ていたクロが声を荒げる。

「ええい、めんどくさい!! 黙らせてくれる。」

クロはそう言うのと牙をむいてエルフの女性に襲いかかろうとするが、彼女の制止の声でその場で唸るだけにとどまった。彼女は見るからにめんどくさそうな様子で手をぷらぷらとさせながら大きくため息を吐く。

「・・・もう良い、そいつは貴様にやる。好きにするがいい。」

そう言うのと彼女は呆然とするエルフ族の女性をそのままに踵を返してその場から歩きだす。その時それまでずっと黙って様子を見ていた奴隷、マルクが慌てて彼女の後姿に呼び掛ける。マルクが森で呼びかけた時は振り向いてももらえなかったが、今回の彼女は少し間を置き振り向くとマルクへと口を開いた。

「・・・今度捕まっても買ってやらんからな、マルク。」

マルクはしばらく彼女を見つめていたが、小さくこくりとうなずく。それを見てクスリと彼女は笑うと歩いて行ってしまった。その様子を見ていたエルフの女性はしばらく何が何だかといったように首を捻り、歩いて行く彼女の後姿を見つめていた。

しばらく歩いて、エルフ達からだいぶ離れた時にクロは彼女に口を開く。

「・・・おいつ、せっかく1金ブロンも出したのによかったのか？」

クロは納得がいていないのか不満そうな顔をしているが、クロの言葉に彼女はいつもは見せることのないやわらかい笑みを浮かべて質問に答える。

「私は慈悲深いからな・・・それにあんな子供を下僕にしても役に立たないだろう？」

それにしても・・・と彼女は暗くなった空を見上げながら続ける。

「すっかり遅くなってしまったな。どこに泊まろうか・・・」

そう言うのと彼女の臣下は目の色を変えて、・・・飯が上手いところが良い！！・・・広いところが良い！！・・・と好き勝手に騒ぎだし挙句の果てにもめて暴れ出す始末。

まだまだ彼女の下僕集めは進みそうもない。

第九話 下僕採集（後書き）

ほんとはエルフの坊ちゃん仲間になる予定だったんだけどなあ・
・
・・・・どうしてこうなっちゃったんだろう・・・
ちなみにこの話、投稿の際にエラーで書き直す羽目に、ムツキー！
！！

第十話 奈落の底に

ぴちぴちと小鳥の鳴く声で魔王と呼ばれるとある人物は目を覚ます。しかし魔王といっても彼女が寝ていた場所は神殿の様な豪華なベッドなどではなく安い民宿の埃っぽい布団である。

彼女は眠そうな目を軽くこすると、自分の脇で寝ているクロを起こすために名前を呼んで軽くクロをなでる。

が、いつまでも起きないクロに彼女はなでる手を止めると手をグーにして音が出るほどクロの頭を殴る。その暴挙にクロは悲鳴を上げて飛び起きた。

「全く、いつまで寝ているつもりだ。」

小さく溜息を吐く彼女をクロは恨めしそうに見上げる。

しかし彼女はそんなクロの視線など全く意に介さず宿を出発する準備をし始める。

すると、いつの間にかどこからともなく気味の悪い金属的な脚を生やした頭蓋骨が不自然な動きで彼女達の元へと現れる。そんなガイコツにクロは頭のひりひりした痛みを我慢しながら口を開く。

「今までどこをほっつき歩いていたんだ？」

そんなクロの問いにガイコツはカタカタと顎を鳴らしながら答える。

「ちょっと外の様子を見に行っていただけですよ。・・・それにしてもこの旅館は前のところと違って金に物を言わせれば結構融通がきくようで助かりましたねえ。また獣のせいで追われるなんて御免ですもんね？」

ガイコツの嫌味にクロは唸り声を上げるが、彼女に軽く頭を叩かれて不満そうながらもガイコツへの怒気を抑える。

食事を済ませて、宿を後にした彼女達はしばらく活気のある街並みを特に何の目的もなく歩いていたがクロは何やら後ろから自分達についてくる気配を感じ取り小さく彼女に口を開いた。

「おい・・・」

「ふん、言われんでも分かっている。」

クロに皆まで言わせず彼女は無表情で答える。彼女はしばらく無言で歩き続けたが、不意に小さく驚いた声を出して空を指差した。いきなりのそれに彼女達を付けていた何者かも空へと顔を上げる。彼女はそれを確認すると、走り出した。

「なっ！！！」

彼女達を付けていた者が視線を戻すとだいぶ離れたところまで走って行ってしまった彼女達の小さな後姿が見える。何者かは小さく舌打ちすると自分も走り出した。

彼女は走りながら後ろを振り返った。

不意を突いて随分離したと思っていたが自分たちを追っていた者は

自分達に追いつく勢いでこちらに向かって走ってきている。

「まずいな・・・どうしたものか・・・」

彼女は走りながら辺りを見渡すと町の一角に馬車が止められている場所を見つける。

彼女は小さく笑うと進む方向をその場所へと変えて走った。

その場所に着いた直後、彼女は御者と思われる男に声をかける。

「おい、時間がない馬車を出してはくれないか？」

「お嬢ちゃん、馬車が出るのはもう少し先だ。そんな時にまたおいで。」

しかし御者は全く聞く耳を持たず軽く彼女をあしらった。

「1金ブロンで特別に出してはくれないだろうか・・・」

彼女は少し困った顔をするが、今度は金で交渉する。

一度は断ったが大金が関わってくるとなれば話は別である。御者は目の色を変えて彼女へと向き直った。

「ほう、1金ブロンねえ・・・今持ってるのかい？」

「持っているが・・・時間がないのだ・・・後にしてくれ。」

「それは無理だね。先払いでなきゃあ・・・」

御者は、なにやら焦った様子の彼女をじらしながら人の悪い笑みを浮かべる。

彼女は仕方がなさそうに手持ちの袋から金色に光るブロン貨幣を1枚取り出し御者へと渡した。

「分かったよ、お嬢ちゃん。特別サービスだ!!」

御者の言葉に彼女は頷くと、急いで馬車に乗り込んだ。

彼女を追いかけていた薄汚れたフードをかぶった何物かは彼女が馬車に乗るのを見て舌打ちをする。

この者の正体は、エルフ族の女性。昨日彼女に襲いかかったエルフだ。

このエルフの女性は彼女の正体が気になり、昨日から彼女達の後を付けている。

御者が馬に鞭をあて出発しそうになったのを見てエルフの女性はより一層走るスピードを上げた。

「うおりゃあああ!!!!」

エルフは馬車が進み出すか出さないかのほんの一瞬に馬車の後ろに手をかけることに成功する。エルフが手をかけた直後、馬車は音を立てて進みだす。

エルフの女性は振り落とされないように取り出した短剣を素早く布切れで自分の手に巻きつけると馬車の車体に突き刺した。

「おい！！ついてきたぞ！！」

クロはしつこく付いてくる何者かを振り返ってみて声を上げる。

クロの視界には、馬車の車体を短剣を使いながらよじ登ってくるフ
ードをかぶった何物かが映っている。

しかし彼女はその人物に心当たりがあるのか慌てる様子もなく小さ
くため息を吐くだけ。

「慌てるなクロ。・・・おいもっと速くできんのか？」

「お望みならもちよつと早くできるぞ。」

彼女はクロをなだめると、御者にスピードを上げるように頼む。

彼女の言葉に御者は馬に鞭を打って馬車のスピードを上げた。

対して馬車を這い上がってくるエルフは急にスピードが上がったこ
とで振り落とされそうになったのを必死でこらえる。

「なんの・・・これしき・・・」

エルフは腕に力を込めると彼女達の座る席を目指して登ってくる。

「おい！！落ちる気配がないぞ！！」

クロはキャンキャンと御者に気付かれない程度に騒ぐが、彼女はそ
れに対して無言のまま眉間にしわを寄せて御者へと詰め寄る。

「おい!! もっと速くできんのか!？」

「おい、お嬢ちゃんこれ以上スピード出したら捕まっちゃうよ。つておい!! 勝手にいじくるな!!」

彼女は渋る御者の手から手綱を奪うと馬を打ち付けた。

馬は声を上げると先ほどとは比べ物にならないほどのスピードで街を駆ける。

「ひい!! やめてくれお嬢ちゃん!!」

あまりのスピードに御者は悲鳴を上げ彼女を止めにかかるがそんなのはお構いなしで彼女はさらに馬を打ち続ける。

異様に速くなったことで先程まで何とか昇ってきていたエルフの女性も振り落とされないように必死に馬車へとしがみつく。どれほどエルフは耐えたのだろうか?・・・

町を抜け、

森に入り、

荒れ地を過ぎ・・・

ごつごつとした山道を通る頃にはエルフの手の感覚もなくなっていた。

一体どれだけスピードを出せば気が済むのだろう。これだけ速さが出ていると振り落とされた時、大けがをするだろうからエルフの手には自然と落ちるのを阻止するために力が入る。

・・・だがエルフが振り落とされない限り馬車のスピードは衰えないわけで・・・

エルフの女性在必死に落ちるのをこらえる限りスピードが上がり続

ける悪循環が続く。

「いい加減にしろ!!」

御者は彼女から手綱を取り返すために彼女に掴みかかるが、彼女はそれに応戦し、揉み合いになる。

「何をする!! 危ないではないか!!」

「お嬢ちゃんの方が危なっかしいんだよ!!」

御者は彼女の手から手綱を奪い返すために彼女の手首を抑えるが彼女もおとなしく引き下がるつもりはない。御者に手綱を取り返されないようにしっかりと握るとぐいと御者から手綱を遠ざける。しかしその弾みで馬が道を外れた勢いのまま崖の方へ倒れこみそれに声を上げる間もなく引きずられて馬車ごと彼女達は崖下に真逆さまに落ちてしまった。

第十話 奈落の底に（後書き）

どうも、この小説もようやく十話になりました。

こんな作者のつたない文章にお付き合い頂いてもらって読者の皆様には感謝のしようありません。

今後もしれなりに頑張って行きたいです。

第十一話 崖の下のプニョプニョ・・・（前書き）

《前回までのあらすじ》

なにやら怪しげな者から逃げていた魔王御一行。

金に物を言わせて馬車を使っただのは良かったのだが、思わぬ事故で崖の下へと真っ逆さまに落ちてしまった・・・

第十一話 崖の下のプニョプニョ・・・

彼女は痛む頭を押さえながらゆっくりと体を起こす。

辺りを見回すとひどい有様だ。そこでふと自分の下敷きになっている物を見下ろす。

「大丈夫か？クロ。」

「大丈夫に見えるか？・・・」

震えながら静かに怒りを表すクロ。

彼女はそんなクロにはお構いなしでゆっくりと立ち上がると原形をとどめていない馬車へと近づいて行く。

「死んでいるようだな・・・」

彼女は瓦礫の下を確認すると無表情につぶやく。

そんな彼女にどこにいたのかガイコツがひょいと現れて彼女へと口を開いた。

「魔王様・・・エルフ族の娘はどうやら息があるようですよ？いかがいたしましょう。」

ガイコツの言葉に少し驚いた様子の彼女だったが、笑みを浮かべるとガイコツの言うエルフの元へと向かった。

エルフの女性は何かに呼ばれるような声で目を覚ました。
目を開けるとそこには自分の追っていた女性がこちらを覗きこんで
きている。

思わずエルフの女性は悲鳴を上げてしまった。

「ぎゃあっ！！！」

彼女は飛び起きたエルフの女性の反応に対し眉間に皺を寄せると、
不愉快そうにエルフの女性に口を開いた。

「人の顔を見て悲鳴を上げるとは失礼な奴だな・・・」

エルフの女性は大きくため息を吐くと彼女へと詰め寄る。

「一体どうしてくれるんだ！！このままだここで死んでしまうぞ
！！！！」

「ふん、ここで野たれ死ぬ気は無いから安心しろ。・・・それより
私達に一体何の用だ・・・マルクはどうした？」

詰め寄るエルフを押し返して自分から遠ざけると、彼女はエルフに
用件を聞く。

「よ、用という程のことでもないのだが・・・あの少年から話は聞
いた。君は彼を奴隷商から救ってくれていたんだね。どうやら私の
勘違いだったようだ・・・すまない。あの少年はあの後私の知り合
いがエルフの里へと連れて行ったよ。」

「ほう、何が勘違いなのかはよくわからんが・・・まさかそれを伝

えるためだけにここまで付いてきたわけではあるまいな？」

彼女の鋭い瞳にエルフの女性は息をのむが、恐る恐るといった様子で口を開く。

「その・・・魔王がどうか言っていたようだが何か魔王について知っているのか？君は魔物を使役しているしその方面に詳しくそうに見えるが・・・」

何やら気まずそうに話すエルフに彼女は無表情のまま自分が魔王だと伝えようとするが寸での所で、クロに止められる。

「いやいや・・・こいつは別にそっち方面には全然詳しくないんだ・・・なっ、ガイコツ！！」

クロは必死に彼女の正体を隠そうとガイコツに話を振るがガイコツは大きくあくびをするとあっさりとエルフに真相を伝えてしまった。

「そこにいる彼女が魔王様ですよ。ワタシ達は魔王様に仕える臣下でございますね、一体魔王様の何が知りたいのですか？」

ガイコツの答えにクロとエルフはあんぐりと口を開けて呆ける。
が、エルフはすぐにそんなわけがないと騒ぎ始める。

「ま・・・魔王というのは、こんなに弱そうなのか！？・・・そんな馬鹿なことがある筈がない！！」

「まあ、落ち着きなさい・・・一体あなたは魔王様に何かする予定だったのですか？貴方の意図が見えないとこちら側も答えようがないのですが・・・」

混乱しすぎて、何が何だか状態のエルフにガイコツは論すると、少し落ち着いたのかエルフは、先程の様に気まずそうな様子でもじもじする。

なかなか話しだす気配がないエルフにイライラしたのかクロは「早くしゃべらんか!!」と怒鳴るとエルフはぼそぼそと話しだす。

「・・・私が生まれるずっと前、大昔の話だ・・・ある魔王の命令で魔物達がエルフの国を襲った。大群の魔物に勝てるわけもなくその土地を逃げ出したエルフたちは人間の住む国に逃げて行ったらしい。しかし人間共はエルフを奴隷のように扱って、弱って役に立たなくなったエルフは自分達の娯楽のために殺していたんだ。

・・・数十年前の話になるが、私の父と母も人間の奴隷にされたんだ。私は人間達に見つからないうちに父と母が知り合いのエルフに預けてくれたおかげでエルフの隠れ里で暮らすことができたんだが、数年前に里に父と母が死んだと伝えられてな・・・どうしても人間と・・・こんな原因を作った魔王に復讐がしたいんだ・・・・って聞いているのか!!」

エルフが淡々と自分の過去と胸の内を打ち明け彼女達の方を見ると魔王は何やら遠くの方を見つめており、犬は寝息を立て、ガイコツは大きなあくびをしていた。

「おい!!人がせっかく・・・」

エルフが羞恥と彼女達への怒りで顔を真っ赤にして抗議の声を上げようとするが、魔王であると言われた彼女は手を挙げてそれを制する。

「あれはなんだ?・・・」

彼女はそう呟くとずっと見つめていた方へと歩いて行く。

「お、おい!!・・・」

彼女が歩いて行くのを、エルフの女性は付いて行く。

エルフの女性に続いて、目を覚ましたクロとめんどくさそうに一部始終を見ていたガイコツも彼女の向かった方へと進んでいく。

・・・・・・

しばらくすると一点を穴があくほど見ている彼女の姿が目映る。

彼女は、付いてきたエルフ達へと尋ねる。

「これはなんだ?・・・」

彼女が指差す先には水色のプニョプニョした物体が転がっている。
彼女はそれを手に取ろうとするが、寸での所でクロが水色の物体をくわえて遠くに放り投げた。

「・・・いきなりなんてことをするんだ。」

「馬鹿か!! あれはスライムと呼ばれる魔物だ。低級だが襲われたらお前ではひとたまりもないぞ!!」

クロは彼女を戒めるが、彼女はクロを見もせずに放り投げられたスライムの方へと進んで行ってしまった。クロ達は慌てて追いかけるが、彼女はスライムを拾い上げてしまう。

「おお!!」

珍しく彼女は驚きの声を上げ、手に乗せたスライムをつついている。クロはその様子を溜息を吐くとそのスライムをどうするつもりなのか彼女に問う。

「全く・・・一体どういうつもりだ。」

「別にどうするつもりもない。少し興味が湧いただけだ・・・それより随分と弱っているようだが・・・なぜだ？」

「ここら辺は水っ気ありませんから・・・確かこの先に小さい小川がありましたねえ。そこに放せば元気も出るでしょう。」

彼女はあまり動きのないスライムをつつきながら首をかしげる。するとガイコツがその原因と解決方法を彼女へと提示した。それを聞いた彼女は小川にスライムを放す気満々のようだが、エルフは焦って彼女に口を開く。

「いいのか？元気になったら襲ってくるかもしれないじゃ!？」

「その時はその時だ」

こともなげに言いきる彼女にエルフは何も言えなくなった。

少し歩くと、緩やかな流れの小川が現れる。

彼女は手に持っていたスライムを名残惜しそうに触るとしゃがんで川の方へと下ろす。

するとスライムは、先ほどよりも多少活発な動きで川の中へと入って行った。

「ふむ・・・一件落着だな。」

しかし立ち上がろうとした時、彼女は川を挟んで数匹の魔物がこちらの様子をうかがっていることに気がつく。

粗悪な布を身にまとった二足歩行の魔物は、人間達からはゴブリンとか呼ばれる低級の魔物である。しかし、集団で来られると意外と厄介な相手で、経験のある兵士でも命を落とすことがある程だ。

ゴブリンを見たエルフは眉を吊り上げ、その目には憎しみの色がこもる。大方大昔の話を思い出してのことだろう。

持っていた短剣を取り出し今にもゴブリンに向かっていきそうな気配だ。

「落ち着け・・・今は分が悪い・・・」

彼女はそんなエルフを軽くなだめるが、エルフから殺気は消えない。彼女はエルフの目を見て説得を諦めたのか大きくため息を吐くとゴブリン達に目を向けた。ゴブリン達は5匹程・・・矢じりの様なものを持ってじりじりとこちらに近づいてきている。

そんなゴブリン達にクロは唸り声をあげ、エルフとともにゴブリン達を迎え撃つ体勢をとる。

しばらくの間、にらみを聞かせるクロ達とじりじり近づいてくるゴブリン達の間で前哨戦が行われる。

しかし、じりじりと間を詰めていたゴブリン達が川に足を入れるか入れないかに差し掛かった時、不意に水面が波立ったと思うとゴブリン達が皆水の中に引きずり込まれた。

水は形を変えると巨大な球の様な形に変化しゴブリン達を体の中に閉じ込める。

巨大になっているが間違いなく先ほど逃がしたスライムだろう。それにしても先程までとは比べ物にならないほど大きい・・・大きすぎる。

しばらくもがいていたゴブリン達だったが、そのうちゴブリン達の体が溶け始め最終的に跡形もなく消え去ってしまった。

しばらく嘔然と眺めていたエルフだったが殺気に向ける相手をスライムに変更して短剣でスライムに襲いかかろうとするが、彼女の制止を受ける。

「どうして止めるんだ！！襲ってくるぞ！！」

エルフは訳が分からず彼女に八つ当たり気味に怒鳴るが、彼女はそれを無視してスライムの方へと声をかける。

「こっちに来い、水玉。」

その声で一気にスライムは見つけた時のサイズに戻ると彼女の方へ寄って来た。

彼女は足元まで寄ってきたスライムを拾い上げるとスライムを手の上でこねくり回す。

彼女はスライムを手でいじり回しながら、呆然とその様子を見ているエルフに声をかける。

「復讐する前に死んでしまっただけは元も子もないだろう・・・お前は

感情に流されやすい、少しは冷静に状況を見極められないとな。」

複数のゴブリンや液体的なスライムに短剣で立ち向かったところで
返り討ちにあうだけだと暗に言われたエルフは感情だけで行動した
ことを恥ずかしそうに謝罪する。

「・・・すまなかった。・・・しかし、どうしてそいつがお前に懐
いてるってわかったんだ？」

エルフの問いに彼女は鼻で笑うと、簡単なことだと口を開く。

「そもそも、私達も襲うつもりだったのならゴブリンを襲ったとき
一緒に襲ったはずだ。それに水玉からは私に対しての殺気を感じ
なかったからな。」

「殺気？・・・そもそもそいつから殺気なんて出るのか？・・・」

エルフのつぶやきにクロは溜息を吐きながら答える。

「こいつに常識は通じないんだ・・・」

クロの答えに彼女はピタリとスライムをこねくり回していた手を止
め、ぎろりとクロを睨みつける。

「・・・水玉・・・あの黒い犬を喰ってしまえ・・・」

「ちょっと待て！？やめろ！！ぎゃあああああ」

彼女の言葉にスライムは素早く反応しクロへ襲いかかる。

そんなクロ達にガイコツも交わりぎゃあぎゃあと騒ぎ始めた。

クロが喰われそうになる様子を人の悪い笑みで眺めていた彼女だが、ふと何かを思い出したのか、呆れてクロ達を見ていたエルフに視線を向ける。

「そう言えば・・・お前の名前は何と言うのだ？」

第十一話 崖の下のプニョプニョ・・・（後書き）

あああ・・・文才と面白いネタが欲しいものです。

第十二話 適材適所

エルフは一瞬彼女の問いの意図が分からずに怪訝そうな顔をするが、少しして質問へと答えた。

「私の名は・・・レイフォード・エルフィーナだ。」

「そうか・・・」

自分から聞いておきながら彼女はエルフィーナの答えにそっけなく答える。

彼女とエルフィーナの間に居心地の悪い沈黙が訪れ、それに耐えられなくなったエルフィーナは彼女にぎこちなくだが話しかけた。

「そ、そんなことより・・・お前達は旅をしているようだが、何か目的があるのか？」

「なんだ？ 気になるのか？・・・エルフ」

彼女はエルフィーナの答えに曖昧に答えるが、エルフィーナにはどうしても見逃せない点がある。

「どうしてエルフなんだ！！ 私の名前はエルフィーナだ、聞いてきたのはお前だろうが！！」

「思った以上に長かったのな・・・れい・・・レイ・・・なんだったか？」

「レイフォード・エルフィーナだ！！ 覚えるのが無理ならエルフィ

で構わない。仲間からはそう呼ばれている。」

エルフィーナは呆れたように彼女に見るが、彼女はそれに全く気にする様子もなく黒い笑みを浮かべるとエルフの質問へと答える。

「ふむ、目的か・・・強いて言えば私の臣下を集めるためだ。魔王には臣下が多くいるものらしいからな。」

「・・・手下を集めて何をするつもりだ?・・・」

彼女の言葉を聞いてとたんにエルフィーナの表情が曇り、先程までと打って変わって低い声で彼女へと口を開いた。どうみても彼女に対して警戒心をあらわにしている。そんなエルフィーナの様子に彼女は挑発的な笑みを浮かべるとあえてエルフィーナの神経を逆なでするようなことを口にした。

「そうだな・・・まず手始めにどこかの村を滅ぼすのもいいかもしれません・・・魔王とはそういうのが仕事なんだろう?」

「・・・やはり・・・魔王なのか。まさかエルフの国の事件に関係しているんじゃないだろうな・・・」

彼女の挑発に簡単に乗ったエルフィーナはさらに彼女に対する警戒心をむき出しにして彼女と距離をとる。ちよつとからかっただけで態度が豹変したエルフィーナに彼女は小さくため息を吐くと、自分の忠告したことをすでに忘れているであろう目の前のエルフに口を開いた。

「感情に流されすぎだ、エルフィーナ。それに私はお前の国の事件の記憶などない・・・いやこれでは語弊があるか・・・関係してい

るか分からないといった方がいいのか？」

「分からないだ？」

怪訝そうな顔をするエルフィーナ。先程よりいづらか感情が抑えられたが、まだ警戒を完全にといたわけではないのか彼女に対して身構えている。

「私には昔の記憶がないのだ。だからはっきりと関与していないとは言えない。しかし・・・いくら私が残虐非道だとしても国一つ潰すほど酔狂だっただろうか、まあ記憶喪失以前の自分とは価値観も違うだろうがな・・・仮に私がその時の魔王だしたらエルフの国を滅ぼした時の臣下が私を放っておくとは考えにくい。しかし今の私には臣下と呼べるのは・・・こいつらだけだからな。多分違うと思うのだが。」

彼女は未だにさわいでいるクロ達に視線を向け、ため息とも何とも言えない息をつく。

エルフィーナも、そんな彼女の言葉に納得したのか苦笑いしながら構えをとりその場の緊張した空気はおさまった。

「まあ、お前みたいな気の抜けた奴だと復讐する気も失せるから、こちらとしても違っていてくれた方が助かるよ。・・・ところでこちらの名前を聞きたいのだが、教えてもらえないだろうか？」

「魔王だといったはずだが？」

彼女はエルフィーナの言葉に呆れた顔をして、何やらかわいそうなものを見るような視線を送る。

「そ、そんな目で見るな！・・・私はお前の本名を聞いているんだ。」

「本名？・・・本名か・・・・・・・・・・うゝむ・・・・・・・・・・」

エルフィーナの慌てながらの言葉に、彼女は首をひねって考えるが全く思い出せないのか、しばらく唸った後エルフィーナに「好きに呼べ。」と投げやり気味に言うとは半分スライムに喰われかけているクロを軽く叱り付ける。

「何をしている。さっさとここから離れるぞ。また魔物がやってきたら面倒だ。」

「だったら早くこいつらを何とかしてくれ！！！」

何とか、クロはスライムの猛攻とガイコツのいびりから逃れられた。しかしその後、彼女が移動するための乗り物にされているから救われない。

「クロ！！遅いぞ、きびきび歩け。」

「やかましい！！！！そんなに嫌なら自分で歩かんか！！！！重いっ！！！」

腰をかけてくつろぐ女性とそれに耐えながら歩く野良犬にしか見えない魔物、何とも滑稽な図である。

しかし、彼女はクロの言葉を聞いて眉間にしわを寄せるとわざとクロに体重をかける。

「私が重い・・・だと？この私がか？」

「おい！！そんなに体重をかけるな！！・・・あ、こら！！・・・ごほっ！！」

重みに耐えられなくなったクロはその場に倒れたが彼女は全く退く気はないようで、未だにクロの上に腰かけているためクロは立ち上がれそうもない。

そんな様子にエルフィーナはクロへ憐みの視線を向けると、クロの上でふてくされたように居座っている彼女へと口を開く。

「これから一体どこに向かうつもりなんだ？この先に何かあるのか？」

「適当だ。」

即答する彼女のあまりにもひどい、いい加減さにエルフィーナは一瞬めまいがして倒れそうになったが、ガイコツがけたけたと笑いながら口を開いたことで、そちらに意識が集中し何とか倒れるのは免れた。

「まあ、そうはおっしゃいますが、この崖を沿って歩けば、確かハニニ帝国の最東端であるリチュレという所につくはずですよ。多分崖の上を進んでいくより、直に進めるので早いでしょう。1週間も歩けばリチュレに着くんじゃありませんか？」

ガイコツの言葉に彼女は軽く相槌を打つと無表情のまま辺りを見渡

し口を開く。

半分忘れられている彼女の座イスとなったクロは顔色が悪くなっており、そろそろいい加減にしないと何かまずそうな雰囲気だ。

「つまり1週間はこの荒れ地で過ごさねばならんということだな。」

彼女の言葉で少しの間、草木が風に吹かれる音だけが辺りに響く。その静寂は、クロから勢いよく立ちあがった彼女によって破られる。あまりにも彼女が勢いよく立ったので敷かれていたいたクロは小さく悲鳴を上げる。

「我々はあいにく食料を持ち合わせていない。そうだな？」

彼女の言葉に小さくうなづくエルフィー達。

町からいきなり崖下まで来るとは思わなかったから食料を持っている者などいるわけがない。

「ふむ、ではこれから今日の夕食をこの場で調達だな。クロは食材集めだ。」

「な！！何で俺がそんな面倒なこと・・・・・・・・・・がはあ！！」

彼女の言葉に抗議の声を上げようとそれまでぐったりしていたクロは勢いよく立ちあがろうとするが、彼女はまたクロへと勢いよく腰をかけて彼の言葉をさえぎった。

「ふふん、異論は認めないぞ。少し運動して私を難なく運べるようになるんだな。」

「あれは筋力の問題じゃな・・・・・・・・・・ぎゃ！！！！」

「ガイコツよ、お前には火を熾してもらおう。」

彼女は下から聞こえてくる悲鳴に表情を変えることもなく、ガイコツの役割を告げる。

ガイコツは彼女の言葉にうなずくとわざとクロの鼻面をかすめて歩くと、火を熾するための材料集めへと向かった。

「水玉、お前には水を持ってきてもらおう。出来るか？」

スライムは、彼女の言葉を聞くと、同意したのか体を小さく揺らすと川のある方へと飛び跳ねていった。

「意外と上手く手下を使えるんだな。ちょっと意外だよ。」

エルフィーナは彼女の指揮の様子を見て軽い冗談を言う。

普通なら、彼女がここで冗談を返してくる筈なのだが、今回は違った。

「エルフィー!!」

「・・・は、はい!？」

彼女はエルフィーナへと振り返ると真剣な面持ちでエルフィーナを見つめてくる。

突然のことに驚いてエルフィーナもつい敬語で返してしまった。

「お前料理は作れるのか。」

「・・・え?・・・」

「料理は作れるのかと聞いるのだ。」

「え?・・・料理!?・・・簡単なものならできるけど・・・」

「ふむ、ではお前は調理係だ、分かったか?」

エルフィーナは突然のことに混乱したかのような様子だが、とりあえずうなずいた。

「だけど・・・本当に簡単なものしかできないぞ?」

「別にかまわん。手が空いているのなら、材料が来るまでガイコツの手伝いでもしておいてくれ。」

エルフィーナは彼女の言葉にうなずくと、何を作ろうかと、小さくつぶやきながらガイコツの元へと向かっていく。

「クロ、何をしている。さっさと行かんか。」

「人の上に居座っておいて何を言っただ!!・・・というからお前は何をするんだ?・・・どうせまた何もしないんだろう!?不公平だぞ!!」

「馬鹿め、クロ。魔王と貴様らが平等なわけがなかるうが。しかし・・・私の慈悲の心がそれを許そうとせん。ちゃんと私の仕事も用意してある。安心しろ。」

「ほんとか!!・・・なにするつもりだ!?!」

クロは期待と不安を抱えながら彼女へと問う。帰ってきた答えは・・・

「食べる係りだ。」

「え?」

「食べる係り」

「・・・味見係ですらないの?・・・」

「食べる係りだと言っておろうが。」

「それって仕事しないのと同じじゃ・・・ぐへっ!!」

第十二話 適材適所（後書き）

どうも、お読みいただきありがとうございます。
ちよびつとずつじわじわとアクセス数が増えているようで嬉しいで
す。

この話もしわじわと盛り上がる・・・はず・・・
何か思う所ありましたら気軽に感想をどうぞ、待っています。

第十三話 トリヲトシ草

しばらくして、半ば強制的に食料調達に出かけたクロは、彼の主である彼女も驚かせるほど食材を集めてきた。スライムは自分の体に水をためてきたのか数倍の大きさに膨れ上がり、その巨体を揺らしながら戻ってきた。

クロやスライムが戻ってきた頃には、ガイコツの熾した火もバチバチと勢いよく燃えはじめていた。

そう・・・ここまでは何の問題もなかったのだ。いや・・・むしろ、かなり良かった。

が、この後思わぬ問題が起こった。

「・・・・これは、何だ？」

エルフィーナの作った料理を見ていつもはどんなことがあっても大抵は無表情の彼女が珍しく引き攣った顔で尋ねる。

「ん？何って、鶏とりの丸焼きを作ってみたんだけど・・・」

エルフィーナは自分のつくってきた料理を彼女の前に置くと、料理を作った際に使った道具類の後片付けをするためにその場を離れる。彼女は、その隙を見て自分の脇に座っているクロへと口を開いた。

「ちょっと味見をしてみろ。」

「嫌だね。それに食べる係りなんだろう？自分で決めたことぐらい、もちろん魔王ならやるんだよなあ？」

「・・・・・・」

クロは昼間の仕返しのもりなのか彼女の言葉を即拒絶すると、痛いところを突いてくる。彼女はそれに対して黙り込むが、いつまでもこうしてはいられない。

無言のままこの料理の対処を考える。しかし特にいい案も思い付かず、そうこうしているうちにエルフィーナが戻ってきてしまった。

「エルフィー・・・私は・・・」

彼女がエルフィーナへと食事をとらないことを伝えようとするが、クロが突然声をあげて彼女の言葉をさえぎる。

「あー、こいつがこの料理あまりにもおいしそうだから一人で食べたいとかわがまま言いだしやがった。まあ俺はさつき狩りしてるときに少し食べたからあんまり腹減っていないんだが・・・お前はどいうするんだ？」

とんでもない嘘である。しかしエルフはその言葉を信じたのか苦笑して彼女へと視線を向けた。突然のクロのあまりにも大それた嘘に彼女は呆気にとられてしまって口をはさめない。

「私はあまり空腹というわけではないんだ。だから構わないよ。でもガイコツやそのスライムはどうするんだ？」

「ワタシには食事の摂取が必要ありません。ですからお氣になさらず。」

ガイコツに続くようにスライムも必要ないと言いたいのか横に体を揺らす。

完全に彼女一人が食さねばならない状況に陥った。・・・かなりマ

ズイ。

エルフィーナ曰く鶏の丸焼きなのだそう、その料理は、確かに頑張れば鶏に見えなくもないといったような見た目で、上には何からできているのか想像もできないどろりとしたタレの様なものがかかっている。非常に食べたくない・・・

しかし、彼女は図書館で呼んだある思想家の下らない、そして今の状況にはびつたりの言葉を思い出す。

『料理の不味は所詮、口の中だけでのこと、多少我慢していれば自分のために料理を作った人を傷つけることもない。対人関係もそうである。他人との関係を良好にしたいなら多少の我慢が必要だ。』

つまり・・・魔王としての面子を保つためにも一度言ったことはやらなければならない。彼女は覚悟を決めると、鶏の丸焼きの様な何かを恐る恐る口へと運んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ結果から言おう。

そんなに悪くなかった。

そう、意外なことにあの見た目グロテスクな、奇怪な、気色の悪い、見たことのない料理の味は彼女にとってそんなに悪くなかったのである。

クロは啞然とした様子で、平然と料理を食べ進めていく彼女を眺めていた。

「ふむ・・・見た目はあれだったが、味はなかなかだったぞエルフイ。」

料理を食べ終えて彼女は素直にエルフィーナへと料理の感想を伝える。

「そうか、気にしてもらえてよかったよ。」

くつろぐ彼女にクロが本当においしかったのか？と疑問の視線を投げかけて来たので彼女も視線でそれなりにと返しておいた。クロはいまだに納得がいけないのか何か考えるようにその場を行ったり来たりしている。

しばらくその様子を眺めていた彼女であったが満腹になったせいか急に睡魔がやってきて彼女の意識は闇に沈んだ。

朝。あまりの寒さに彼女は目を覚ました。

森の中というのはこんなにも冷えるのか、と彼女は眠たい眼をこすって辺りを確認する。すると近くでだらしなく眠りこけている自分の臣下が目に映ったので彼女はその臣下を自分の方に引き寄せた。

「んん・・・？何してんだ？暑苦しいぞ？」

それによって眠りから覚めたクロは自分と身を寄せている彼女に口

を開いた。

「私には毛皮がないから寒いのだ。」

彼女の言葉にクロは首を傾げるが、まあ大したことでも無いのでそのまままた眼を閉じる。

しばらくしてクロが2度寝から目が覚めて、エルフィーも起きた。しかし彼女は未だに体を丸めて寝ている。クロはいつまでも寝ている彼女に溜息を吐く。

「いつまで寝ているつもりだ!! 早く起きろ。」

「・・・黙れ・・・寒い、眠い、だるい・・・」

彼女はクロの言葉をうるさいと言わんばかりに更に体を丸めるとクロ達とは反対側の方へ体を転がして背を向ける。

しかしクロは彼女へと近づくと眠る彼女の耳元で起きろと何回も怒鳴りつける。

最初は無視を決め込んでいた彼女だったが数十回くらい後にようやくだるそうに体を起こして、クロを睨みつける。

「まあまあ、で・・・どのルートでリチュレに行くんだ?」

陰悪なムードの彼女とクロをエルフィーナはなだめると今後の予定をどうするのか尋ねる。それに答えたのはいつの間にか現れたガイコツであった。

「このまま直進するのが最短のルートですが少々荒れた道のりですから右に回って行くといいんじゃないですかね? 左は森があります

から魔物がいそうですし。いかがいたしましょう魔王様。」

「ん？・・・最短ルートだ。」

彼女はガイコツの質問に即答。このまま直進でリチュレに向かうことになった。

もちろん彼女はクロに乗ってである。

「暑い。」

ふらふらと歩くクロの上で彼女はぼつりとつぶやく。

「俺はもつと暑い。もう無理・・・」

「そうではない。なんだか体が熱っぽいのだ。それになんだか苦しい。」

「俺は今お前を背負って体が暑くて熱っぽいし、苦しい!!」

噛み合っていない二人の会話。エルフィーナは呆れてその様子を見ていたが、ふとガイコツが疑問を口にする。

「おかしいですねえ。朝は寒いと言ったり今は暑いと言ったり・・・今日は朝から涼しい過ごしやすい日だと思うのですが・・・」

「確かに、風邪気味なんじゃないのか？」

しばらく彼女はクロとかみ合わない会話をしていたが、クロに止まるように言っているとクロから降りてスライムの方へ体を向ける。

「水玉、水を少しくれないか？私の手にそそいでくれ。」

彼女は両手でお碗を作るとスライムへと差し出した。スライムはふわふわと揺れながら彼女の方へと近づくと体いっぱいを含んだ水を染み出させた。その水が彼女の手の碗にそそがれて水でいっぱいになると、彼女は水がこぼれおちないうちに口へと水を運ぶために体を屈めた。

が、突如その場で前のめりになって倒れてしまった。

「だ、だいじょぶか！？」

まさかの事態に慌てて彼女の様子をうかがうクロ達。

苦しそうに顔をゆがめている彼女の様子を見てガイコツは自分の推測が確信へと変わったことを理解する。

「まずいですねえ・・・これは風邪ではありませんよ。何かの毒にあたったんでしょう。ほっとくと死にますよ。」

「なんだと！！いつ毒になんて当たったんだ！？・・・」

ガイコツの言葉に声を荒げるクロであったが心当たりがあるのかエルフィーナを睨みつける。

「エルフの小娘・・・貴様、あの料理に毒をもったりしてないだろうな？」

「ば・・・馬鹿を言うな！！あの料理には何も入ってないぞ！！」

「だがあの料理以外に毒にあたる機会がない！！昨日の夜、俺は見張りをしていたが毒ムシにかまれたわけでも、魔物に襲われたわけでもないぞ！！あの料理を食べてからおかしくなったのだ！！」

「まあまあ・・・落ち着きなさい。彼女の料理を作るところを見ていましたが特におかしな行為をしているようには見えませんでした。毒をもったのではなく使った料理に毒を持った材料が含まれていたのでしょうか。」

落ち着いた様子で淡々と語るガイコツにクロはいくらか冷静になったのか、エルフィーナに何の食材を使ったのかと聞く。

「昨日の料理に使ったのは、あの鶏と私の持っていた調味料ぐらいだよ。」

彼女はそういいながら自分の持ち物入れから調味料の入った小さな瓶をクロ達へと見せる。

「こちらの調味料はどこで作られたものでしょうか？」

ガイコツは小さな小鬘に入った粉状の調味料を見つめる。

「これは私の住むエルフの里で作られたものなんだ。道化野草とかエルフ草とかの粉を混ぜてあるんだ。」

エルフィーナの言葉にガイコツは、なるほど、なるほどと、うなずくとやっと原因が分かったと大きく溜息を吐く。

「原因が分かったってどういうことだ！？」

「何が原因だったんだ！？やはり私の料理だったのか？」

「まずは落ち着きなさい、ゆっくり話も出来ないじゃないですか。いいですか、エルフはあまり人間と食事をとらないですし、もし一緒に取るとしてもほとんどが人間によってつくられた料理を食べるのでエルフは知らないでしょうが、エルフ草とはトリヲトシ草のエルフの呼び名なんですよ。」

「トリヲトシ草？」

エルフィーナは聞きなれない言葉なのか、ガイコツの言葉を復唱する。

クロも聞いたことがないのか怪訝そうな顔をしている。

「エルフのあなたが知らないのは無理ありません。トリヲトシ草とはエルフ草の人間の呼び名ですから。まあその獣が知らないのはいささか恥ずかしいですがね。やはり獣は無知なんですねぇ。」

「なんだと！！！！」

「そんなことより、そのトリヲトシ草とエルフ草の名前の違いが今回のことにどう関係しているんだ？」

「そんなことって言うな！！！！」

「獣は黙っていなさいな。簡単に言うतすね、トリヲトシ草は毒草なんですよ。」

騒ぐクロを軽くあしらいながらの言葉にクロは気にいらな様子でふてくされるが、エルフィーナはそんなはずはないとガイコツに喰

ってかかる。

「私はこの調味料を使っても毒になど当たったことはない!!」

「ほんとにあなたは・・・感情的ですねえ。エルフはトリヲトシ草に対して免疫を持っているんですよ。しかし、魔物や人間などには免疫はありません。ですから魔王様は毒にあたったのでございましょう。まあ、魔物には免疫はありませんがトリヲトシ草程度の毒ならばへでも無いんですがねえ・・・魔王様は繊細ですから・・・」

「ど、どうすればいいんだ？」

「知りませんよ。早く医者に見せるべきでしょう。ああ、後はエルフの血を飲んでからトリヲトシ草を食べれば良いなんて言われてますけど、今回はすでにトリヲトシ草を食べてしまっていますからねえ・・・まあ効くかは分かりませんねえ。」

昨日の夜に食べたものだ。毒はだいぶ体に回っている筈である。非常に良くない状況だ。そんなときにクロが単純な疑問をガイコツに投げかける。

「おい骨、トリヲトシ草の毒はどの程度のものなんだ？」

「まあ、基本的にはめまい、吐き気、後は体が寒く感じてだるいかですね。症状が悪化すると、熱が出て、意識がもうろうとしたり幻覚が見えたりひどい心臓の痛みが襲ってきます。魔王様が我慢なされるものですからすっかりワタシも唯の風邪だと思ってしまうましたよ。」

「我慢？かなり言いたい放題だった気がするが!？」

彼女の態度を思い出したようでクロは顔を歪めるがガイコツはかぶりを振った。

「トリヲトシ草の症状はそんなに軽いものじゃないですよ。とある人間の男は嘔吐を繰り返した挙句、痛みから胸をかきむしって、最後には発狂して死んだとあります。またドワーフ族の例では幻覚症状があらわれて最後には全身に毒がまわって死んだとかですねぇ、結構えげつない死に方をするんですよ。魔王様の症状をみるかぎりかなり悪化していると思います。先ほどまで平然としていたのが嘘のようですよ。」

クロはガイコツの言葉に舌打ちすると彼女へと視線を向ける。

顔を歪ませながら耐えている彼女の様子からはまさか発狂死するほどの毒に侵されているとは思えない。

「とりあえずどうすればいいんだ？」

「そうですねえ・・・望みは薄いですがとりあず、多量の水で胃を洗浄してエルフの血でも飲ませますか？いかがでしょうエルフイーナ氏。」

「私の血が役に立つのなら喜んで協力しよう。」

「じゃあ早速始めるか、おいスライム！！」

クロは彼女のそばにいるスライムへと声をかけた。

第十三話 トリヲトシ草（後書き）

少し間が空いてしまいました。（なにしてたのって話ですね）
そしていつものように内容が無いよう。

第十四話 逃げた先は海の町

「・・・何のつもりだ。」

ふと意識を取り戻した彼女は、後ろから自分を羽交い締めに行っているエルフィーナに疑問を投げかける。頭痛がひどく、体も、※重ダル（重く、だるいの略）状態なので振り払う気力もわからない。

「ちょっと苦しいと思うけど我慢していてくれよ。」

「は？」

どういう意味だと聞き返そうと彼女が口を開いた拍子に何かが侵入してくる。

慌ててその正体を確認するとなんとスライムが水を含んで巨大になった体の一部を管のように細くして自分の口に無理やり入ってきていたのである。彼女は慌ててスライムを止めようとするが、唯でさえ気を失うほど気分がすぐれないのに体を押さえつけられていればそれは叶わない。

「むぐ!! んぐうつ・・・んぐぐつ・・・」

スライムは自在に形を変えてどんどん彼女の喉を通り体の奥へと入って行く。

気持ち悪いことこの上ない。

と、ふいにスライムから水があふれだしを大量に彼女へと飲ませ始めた。・・・マズイ・・・彼女は焦る。何もしなくても吐きそうなくらい気持ち悪いのに、スライムが喉の奥へと侵入、そしてそんな状態で水を大量に飲ませられたら・・・間違いなく吐く。

魔王としてのプライドが著しく削り落されるそんな行為は絶対にしたくない。

彼女はすべての水を必死に飲み下していく。

「……しかし、息継ぎもなしに飲み続けるのは無理なわけで、だんだんと酸欠状態に近づいていき、彼女は吐き気と酸欠から苦しそうに顔を歪ませる。吐くのも時間の問題だ。この時にはすでにエルフィーナもスライムも油断していた。しかし彼女はそれを見逃さない。

彼女は唯一、自由になる足でスライムの本体を地面にめり込ませるほど踏みつけ、エルフィーナがそれに驚き拘束を緩めたすきにそこから逃げ出す。

「……一体、貴様ら何のつもりだ」

彼女は乱れた息を整えながらエルフィーナ達を睨みつける。とそれまでの様子を眺めていたガイコツが苦笑いして彼女の問いに答えた。

「魔王様、どうやら魔王様は毒草を食べてしまったようなんです。ですから我々は胃を洗浄しようとしたわけでありまして。無理なさらずに……ささ、続きを。」

ガイコツの言葉で、エルフィーナとスライムは彼女を追い詰めるように一歩一歩近づいてくる。

「……このたわけめが……」

彼女は苦々しい表情でそう言い捨てると、この場から逃げる手立てを考える。

彼女の目にここから少し離れたところでこちらを眺めているクロが

映った。

「クロ！！逃げるぞ。」

「洗淨しないと死ぬらしいぞ？」

「医者に行く。リチュレまで連れて行け！！」

・・・無理だろう・・・とクロは溜息を吐くが彼女は走りながらクロの方までやってきた。後ろからはゆっくりとエルフとスライムが迫ってきている。どうせ逃げられないと思っているのだろう。

「クロ、頼む。」

「ったく・・・しゃーねーなあ。リチュレの名産品で手を打とう。」

そう言ったかと思うとクロは彼女を背負って目にもとまらぬスピードで森をかけていく。あたかも疾風のようなそれはすぐに見えなくなった。

「まずいですねえ・・・すぐに追いましょう。」

「しかし・・・本当に大丈夫なのか？見失ってしまったが・・・」

「まあ、魔王様達はリチュレに向かっているはずですから私たちもそこへ向かいましょう。」

残されたエルフィーナ達も彼女達を追いかけるべく走りだした。

「まったく、どうしたものか・・・」

クロは小さくつぶやいた。魔王である彼女はクロの上で寝ている。あの後クロは全力で走り続けた。エルフィーナ達が追いついてきそうな気配はない。まあ、クロが全力で走ったスピードについてこれるわけではないのだが。

クロはちらりと背中の中の彼女へと視線を向ける。彼女の体調は徐々に悪くなっているように見受けられる。クロにはあとの程度彼女の命持つのかわからない。もう手遅れかもしれない。クロはとにかくリチュレへと急いだ。

クロはそれから走り続け2日後つまり、崖に落ちてから4日後に、とうとうハンニ帝国東端の町、リチュレにたどり着いた。

「おい、着いたぞ。」

クロは背中の中の彼女へと声をかける。反応は無い。クロは上にいる彼女が落ちないようにゆっくりと歩く。

人目につかないように裏道を通りながらクロは町医者の家を探し回った。表の道では活気のある村人の声が聞こえる。

リチュレは海に面している町で、特に海産物が名産であり村人達には欠かせない食材ともなっている。海産物を調理するおいしそうなにおいがふと、クロの鼻に届いた。

「海の食べ物か・・・うまそうだな。おい、約束覚えているだろうな？」

反応はないが気にせずにクロは彼女にとりあえず話をしていった。そんな風に裏道を進んでいくと、医者の家らしき建物を見つける。

「お薬ありがとうございます。」

そんな声が聞こえたかと思うとその建物から一人の女性が小さく微笑みながら出てきた。薬と言っているあたり、まず医者関係の建物と見て間違いなさそうだ。

出てきた女性がその場から離れるとクロは辺りの様子をうかがいながら女性の出てきた医者の家らしいところの前へとやってくる。

「ふん、約束は守ったからな。」

クロは背中 of 彼女を建物の前へと下ろすと、その場を立ち去る。

海に近い町のせいか、クロの体に当たる風がなんだか冷たく感じた。

「息子さん、お大事に。」

20代半ば程だろうか、若い男性医師ウェーブス・マックは息子が風邪をひいたらしい女性に微笑んだ。

「お薬ありがとうございます。」

そんなマックの言葉に女性は小さく微笑み返すと、扉を開けて出て行った。

マックはそれを見届けると、一休みするためにカップに紅茶を注ぐとそれを口に運んだ。医師といっても彼はほとんどの仕事は薬の処方程度なので、彼は薬にかけてはかなり詳しいが、大きい手術や治療なんかになると全然手も足も出ない。

本来彼は、宮廷医師と呼ばれるハンニ帝国の王に仕える医師の家系の者であった。

しかし、彼は知識はあるが血を見ると気絶してしまう性分なので、まともに重症患者を見ることができないため、彼は宮廷医師にはなれずハンニ帝国の東端の町医者をやっているのだ。

彼がカップの紅茶を半分ほど飲んだ頃、外で何か物音がした。どうやら自分の家の前のようだ。最初彼は、薬を買いに来た客かと思ったのだがなかなか中に入ってこない。

特に気に留めるようなことでも無いのだろうが、特に暇でやることもなかったマックは扉を開けてみた。

と、彼の目に飛び込んできたのは倒れた女性。

「え・・・えええ!!!!」

彼は急いでその女性を抱き起こす。

漆黒の髪に黒い服のその女性は、彼がいくらゆすつてもぐったりとしたまま動かない。

そして体も冷え切っていた。

「も、もしかして・・・し、し・・・死体!？」

マックは小さく悲鳴を上げた。

彼女を抱きかかえていた手を離し、ズササツと音が立ちそうなくらいの速さで彼女から距離をとった。どうしよう、どうしようと考えながら彼女へと視線を向ける。

やっぱり死体の様に動かない。・・・しかし仮にさっきの物音が彼女だとすると何が原因でこの家の前で倒れたのだろうか。

見たところ特に外傷はないようだし・・・いきなり倒れるのは変ではないだろうか・・・とりあえずマックは自分の家の中に彼女を運ぶと、ほとんど使わない患者用のベットに寝かせた。

「それにしても・・・こうしてみるとえらくきれいな人だな。」

見ようによつては眠っただけのようにも見える女性をマックは観察すると一応脈をとってみる。

「脈がない・・・つまりは死人か・・・あーもったいない。」

しかしさっきのものが音があったということはさっきまでは生きていたということだろうか、それとも別の誰かがこの家の前に彼女を捨てたのか。

うん．．とマツクは唸りながら考える。

しかし一応医者である自分のいる家の前に倒れていたということが何か引かかる。

「何かの病でここに向かっている途中に倒れたとかかなあ．．．でもここは大した薬を置いてるわけじゃないのになあ．．．」

考えれば考えるほど混乱してきた。

まあ、彼にとつての救いは彼女が眠っているような自然な死体だったことである。

これが血とか何とかが出ていたら即、彼は気絶していた。

まあ、彼も曲がりなりにも医者であるし、代々宮廷医師をやっている血筋の者であるからこのようなことを調べるのも興味がないわけじゃない。

「ん、とりあえず冷たくなって眠るように死ぬ原因を調べてみるかあ。」

役人への死体発見の報告はそのあとでいいや．．と彼は呟くと自分がまだ周りから期待されていた頃に、親が買い与えた医療書を見るために自宅裏の倉庫へと向かった。

第十四話 逃げた先は海の町（後書き）

なんか考えていた話とかなり違う・・・

第十五話 ワンとピーからのひらめき(前書き)

・・・ふざけました。・・・

というか毎度のことですが話が雑です。すいません・・・

第十五話 ワンとピーからのひらめき

「おゝあつた、あつた。」

薄暗い倉庫の中で分厚い本を何冊も見つけたマツク。

随分と長い間放っておいたせいか埃まみれで、汚れている。

マツクは薄暗い倉庫から何冊かの本を持って出てくると、仕事用の小さい木の机の上にドスンツと勢いよく置いた。

本をここまで持ってくる間にしびれたのか、手をぶらぶらと振ってその後には本の表紙をめくった。

「いやゝ懐かしいなあ・・・ん？なんだこの落書き、小さい頃に書いたのかな？」

子供のころに書いたのだろうかグルグルと塗りつぶしたような黒い丸が書いてあるページがあった。

彼は苦笑いしながら早速彼女の死因について調べ始めた。

彼が本を読み始めてからどれほど経っただろうか、日が沈み暗くなった部屋の中に明かりが灯される。

「んゝ・・・分かんないなあ。もう役人に任せちゃおうかなあ・・・」

彼はだるそうに本をぺらぺらとめくりながら溜息を吐いてベッドに横になっている女性へと目を向ける。眠っているようだが息はしていないのだ。

あまり長い間、死体と一つ屋根の下で暮らすのは遠慮したい。

結局どんなに調べてもこれといった確固たる原因は分からないのだからさっさと役人に死体処理してもらおうかと考えたマックだったが少し死亡の原因らしい病の例も数例見つけているためもう少し調べてみたい。

原因が分かったところで、特に何もないのだが彼自身の自己満足のためにも医療書を見あさるマック。ちなみに何冊もある本のうちまだ1冊目の半分を読み終わったくらいである。

「あゝもう無理・・・続きは明日にしよう。」

彼は医療書に紙切れをしおりとしてはさんで閉じるとそのまま机に突っ伏して寝始めた。

こうして彼は一つ屋根の下、死体とともに一夜を過ごした。

翌日、彼はうるさく鳴く鳥の声で目が覚めた。

眠たい眼をこすりながら彼は目を覚ますために紅茶を入れる。

暖かい紅茶を飲みながら彼はベッドに寝かせた死体を覗きこんだ。

「んゝやっぱ美人だなあ・・・にしても1日たっても特に変化無し

ってことはキエルサイコ病じゃないのか・・・」

なんだ残念・・・彼は溜息を吐いてしおり替わりの紙切れをはさんだ本を手にとった。

ちなみにキエルサイコ病とは、眠り蛇と呼ばれる生き物にかまれた際にかかる病気である。この蛇には猛毒があり噛まれると、じわじわと体に毒がまわって眠るように死に至るという。

マックの中では結構、彼女の死因の有力候補だったのだが、この症状には死んだ後にも続きがある。

死体は死後しばらくすると皮膚が紫に変色するのだ。この彼女がもし眠り蛇にかまれたのならばとくに皮膚に変色が起ころうともよいのである。

「なんなんだよこの無駄に白い頬はあゝ紫になれよお」

べしべしと軽く彼女の頬を叩いてみたが反応は無い。

「まったく・・・後考えられるのは・・・あれ？」

彼が数ページパラパラと流し読みしていくと、あるページから文字が印刷されていない。古い本特有の黄ばんだ色のまっさらなページがただ続くばかり。

・・・・・・落丁本だ。

「あああああ！！！！なんで！？落丁本？・・・あれ？そう言えば小さい頃はちゃんと読んでなかったから気付かなかったのか？」

マックは頭を抱えながら「分かんないよ」と泣きごとを言うが、しばらくしてむっくりと無言で立ち上がると家の表の方へと向かう。

「今日は休養日にしとこ・・・死体見られたらまずいし・・・」

・・・マックはその後2冊目を手に取りだらだと医療書を読んでいくが、特にめばしい情報も見つからない。今回も一冊を読み終わる前に日が暮れそうだ。

2冊目の本を読みかけに、マックは3冊目に手を伸ばす。

「しょうがない・・・このままってのもなんだしなんかこの死体^{ヒト}で実験でもしよう・・・」

3冊目は主に死体についての医療書だ。それまでの1冊目や2冊目とは内容が多少異なる。

「んゝこれにするか。楽だし・・・面白そうだし。」

マックは邪悪な笑みを浮かべて準備に取り掛かった。

宮廷医療入門 3章 死体とシラバトロン 頁89 より。

『ここに面白いものがある。シラバトという魔物の尻尾だ。シラバトは良く知られる魔物であるが、その尻尾と死肉の反応が珍しい。まずシラバトの尻尾から精製されたシラバトロンという薬品を生き物の死体の皮膚に付けるとそれが変色するという現象が見られる。これは死体に限ってであり、生きている物の皮膚に付けても反応しない。この原因はいまだに解明しておらず、詳しくは不明。』

シラバトロンならばマックも所有している。

彼は小瓶を持ってくると彼女の元へとやってきた。

「さすがに顔だと役人に渡す時にまずいからなあ・・・せめて掌に

しておいてあげようか・・・」

マックは彼女の手にはシラバトロンで下らない絵を描くと、本へと目を移す。

「後は半日待つだけか・・・ってことは明日の朝だな。これ終わったら役人に渡そうっと。」

彼は本を閉じるとその場を離れる。

もはや彼の頭の中からは死因の究明という医者っぽい欲求は消え失せていた。

彼が宮廷医師になれなかったのはこういう所も関係しているのだろうか・・・

「・・・着いたな・・・」

フードを深くかぶったエルフィーナは疲れた顔をしながら港町リチュレへとたどり着いた。

不眠不休でここまで来たのだから疲れていて当然だろう。

対するガイコツとスライムはぴんぴんしているが・・・

「ふむ・・・どうしましょうかねえ、とりあえず手分けして魔王様をお探ししましょう。死んでなければこの街をうろうろしていると

「思いますよ。」

不吉な物言いにエルフィーナはガイコツを睨むがガイコツは全く意に介さずに続ける。

「ではワタシは医者関係の方を調べますから。貴方達は、宿などの方を調べてください。」

「ああ、分かった。」

エルフィーナは頷くと手のひらサイズに戻ったスライムとともに町の中にまぎれていった。ガイコツはそれを確認すると人通りの多い表道を避けて裏道へと回る。

「全く・・・一体どこに行ったんでしょねえ・・・」

ガイコツは小さくため息を吐くと黒い霧を纏う。しばらくして、霧がはれるとそこにはすらりとした長身の男がいた。切れ長の目で辺りの様子を見渡す。

誰もいないことを確認して男は冷たく笑うと、人通りの多い表道へと歩いて行った。

「・・・あれ?・・・」

マックは首をひねった。朝起きて彼女の掌を見てみたのだ。なんとそこには……!!……何もなかったのである。

しかし、確かにマックは彼女の両手にシラバトロンで落書きをしたのだ。右手には犬を、左手には鳥を、……。だから彼女の手にはかわいらしいワンちゃんとピーちゃんが見れなければならなかったのである。しかし……。彼女の手には何もない。ワンちゃんもピーちゃんもいないのである。

「やり方を間違えたのかな……。まさか死体じゃないなんてことは……。…」

マックは彼女を見下ろす。数日たっているがマックが発見した時から全く変化は見られない。眠っているように見えるままだ。……

「いやいやいやいや!! ないないない……。まさかねえ……。ちゃんと脈も取ったしい……。…」

彼はもう一度ちらりと彼女を見る。

「……。仮死状態になることなんてあるのか? ……」

マックは乱雑に重ねられた本の一つを手にとった。

リチュレの町には似合わない、貴族の様なそれでいて何か違うよう

なすらりとした男が町をゆつくりと歩く。切れ長の目に長髪を後ろで一つにまとめた彼の姿は町の者の視線を集めた。

「全く、・・・せつかく化けたのにこれでは意味がありませんねえ・・・・」

そんな小言をいいながら、しかしまんざらでもないような顔をして彼は近くでこちらを見ていた少女に声をかける。

「すみません、ここの町で医者をやっている場所はどこにあるでしょうか？」

「えっ!! あっ・・・あのっ・・・確かこの道の先に病院があったと・・・思います。・・・」

少女は突然声をかけられたからか、ワタワタと顔を赤くしながら男へと説明する。

男はそれに微笑んで礼を言うと、少女はさらに顔を赤くさせて走って行ってしまった。

「クク・・・人間とはまあ・・・扱いやすいものですねえ。」

男は一人、その顔を歪めて笑うと、少女の言っていた病院へと足を運ぶために歩き出した。

第十五話 ワンとピーからのひらめき（後書き）

魔王「ふふん、私が登場しない話しは盛り上がりがないからな・・・特別にあとがきに出てきてやったぞ。喜ぶがよい。・・・まあ、しかし・・・あれだな。場面転換が多くて読みにくいな・・・。皆もそう思っただろう？それにこの医者、まったく役立たずではないか。もっとよい医者はいなかったのか？・・・まあ、今はそこは言及せんがな。・・・ん？・・・私はそんな些細なことを気にするほど心が狭くないのだ。だからその程度の事なら目をつぶってやる。」

・・・しかし、一人で話し続けるというのもさみしいものだ。誰か私の話を聞いているのか？・・・分らん。・・・まあ、まあいい、私に質問があるならしてもよい。ふふん、私が直々に答えてやろう。ではまた、次は本編で会えるとよいな。」

第十六話 二人の愛のために

「ぐふふふっ」

とびきり下品な笑い方をするものが一人。いや・・・一匹。言わなくても分かるだろうが、クロである。

「いやあ、まさか俺にこんな才能があったとは。この姿も捨てたもんじゃないな・・・」

彼はいま非常に気分が良い。ことの始まりは何気ない村人の気まぐれからであった。

どこにでもいるだろう、やたらにその辺にいる野良の動物に餌をやるものが・・・

「おう、わんこ・・・どうした元気がないな。腹減ってんのか？コレ食うかい？」

まあこんな調子で、最初は特に意識していたわけではないのだが、だんだんとクロの方も味をしめてきた。かわいらしく尻尾を振ってお座りをすれば、気の良い村人はすぐに食べ物を与えるわけだ。愛想を振りまくだけでただ飯にあり付けるとは、願ってもないことである。

「あいつから奪った金もあるし、生活に困ることはないだろう・・・ま、しばらくはただ飯にありつかせてもらうとして・・・どうするかな・・・」

クロは、漁師からもらった魚を口にくわえながら今後の予定を考え

る。ちなみに奪った金とは、魔王の所有していた金のことである。

「とりあえず・・・あそこの肉屋の肉にありつかせてもらおうとするか・・・」

良いにおいを漂わせる肉屋が目に入り、クロは肉屋の焼く分厚いステーキを目標に肉屋に向かって駆け出す。

しかし、そんなときに嫌な声がクロの耳に入った。

「スライム!! あいつを捕まえるんだ。」

そんな声が聞こえたか、聞こえないかのうちにクロは悲鳴を上げることでもできずに裏道へ引きずり込まれた。

「おい!! 魔王はどうした!? 一緒じゃないのか?」

逃げ道をふさがれどうしようもなくなったクロにエルフィーナはもつともな疑問を投げかける。

「ん・・・なんか死んだっぽいから医者っぽいとこの前に捨てておいたよ。」

てへっと可愛く尻尾を振りながら答えたクロにエルフィーナは暖か

いスープに氷を入れながら飲む変わり者を見るような目でクロを見つめる。

「もう一度聞く。魔王はどうした？」

エルフィーナは短剣を抜きながらクロに先ほどと同じ質問をする。クロはその様子に目を細めると魔物特有の凄みのある声でエルフィーナに口を開いた。

「この先にある医者家の前に置いてきた。そのあとは知らん。」

「なっ・・・どうしてだ！？お前は魔王の家臣なのだろう？主人を放っておいていいのか！！」

「もはや主人ではない。ただの屍だ。医者に連れて行ってやったのも生きているときに命じられたから仕方なく運んでやっただけだ。」

「なんだそれは・・・」

エルフィーナが小さくつぶやく。

クロはめんどくさそうに、あくびをするとその場を後にするために立ち上がる。

まだステーキは残っているだろうか。

「おや？皆さんお揃いで・・・どうされました？」

すると突然、クロの向かおうとしていた表通りの肉屋のある方から歩いてきた、長身の男がなれなれしく話しかけてくる。

男はクロ達の表情から何かを感じ取ったのか苦笑いしながら軽い口調で話した。

「ワタシですよ。レイフオンドですよ。」

いや、・・・名前言われても分かんないです。

クロは男から距離をとりたくなったので、一歩下がった。

「分かるわけないか・・・はあ」

紅茶を口に運びながら古ぼけた本を見ているのは宮廷医師の血を継ぐ若き医者、ウェーブス・マックその人だ。薬や医療に関する知識は申し分ないのだが、残念なことに血液がダメなので手術ができず、ダメ医者の烙印を押された町の薬屋さんである。

「そもそも仮死状態になる例なんてそうないし、あるって言っても絶対違うだろうしなあ・・・」

マックは紅茶を飲み干すと、仮死状態になった病人の数少ない例にもう一度目を通した。まあ、笑ってしまうような話ばかりで、だいぶ胡散臭い話である。

宮廷医療入門書 12章 特殊な症状の例3 仮死状態 頁35
より。

『仮死状態とは一見死んでいるように見えても、数日後に息を吹き返したり、治療の末に助かると言うような症状のこと。とある男性の死体を火葬にしたところ、仮死状態から目覚めた男が、悶え苦し

みながら焼け死んだという話があるように、厄介極まりない。ほとんど見られないことではあるが、以前にあった仮死状態の例をここで紹介したいと思う。

アクマバチと呼ばれる毒虫に、刺された男が10日後に自然に眠りから覚めたと言われる話があるように、自然回復タイプと、ホロホロ鶏についていた寄生虫を摂取したことで昏睡状態に陥った女性が、医者の方方した薬によって目覚めると言う、介入回復タイプの大きく分けて二つに分かれる。

自然回復タイプについては、魔物もしくはそれに通じる者の影響の被害者も多く、ある歴史書に、北に住む魔女に魂を奪われた男が、仮死状態の症状を起こしたことが記される。これは、医療的にどのような手を施しても目を覚まさなかったが、勇者によって魔女が退治されると男の意識は戻ったと言われており、魔物に関する研究が進んでいない現段階では、このような症状の治療法は不明である。仮に自然回復タイプの仮死状態である患者だと分かったのなら、数日は様子を見ることが重要である。

より医療で重要になるのは、介入回復タイプの方であろう。

ホロホロ鶏に寄生する寄生虫は人の臓の働きを弱め、脈も取れなくなるほど心の臓の働きは弱まる。しかし、犬の血と蛙の腸を混濁させた液を飲ませると、虫下しの役割を果たす。これでも治らないときは、胃を切り開く大がかりな手術が必要とし、直接寄生虫を取り出さねばならない。

他には、トリフトシ草を誤って食べた場合に、間違った治療として多量の水を摂取させた時に仮死状態に陥り、これは蜂蜜に』

あれ？

マックは目をこすった。

だが、その続きからは空白で何も書いていない。

蜂蜜に……。なんなのだろう。とてつもなく気になる。

「つていうか・・・いい加減な本だな。落丁本多くないか？」

マックは溜息を吐くと、彼女の様子を見る。

死んでいるようにしか見えない。魔物だか何だかの関連の仮死状態なら治療は無理だし、犬の血、蛙の腸なんていうグロテスクなものはどうやったら手に入るかわからないし、手術も当然却下。後は蜂蜜に・・・・・・・・の方法が気になるが途中から書いてないので無理。結局仮に仮死状態でも助けるのは無理。ということで役人に知らせに行くのが良いなあと自己完結するマック。

だがしかし・・・・と、マックは今度は仮に彼女を助けだせた時の場合を頭に浮かべてみる。

マックの治療によってうつすらと目を開ける彼女。

「こ・・・ここは？」

状況の飲み込めない彼女はきょろきょろとあたりを困惑した顔で見回す。

そこで、一人のナイスガイが目に入り戸惑う彼女。ナイスガイは微笑んで彼女へと口を開く。

「心配いりません。お嬢さん。貴方は少しの間夢を見ていただけなのです。」

「まあ、彼方のお名前は？」

「ウェーブス・マックというしがない町医者ですよ。」

「ウェーブスさん。本当に・・・ありがとうございます。」

「いいえ、お嬢さん。マックとお呼びください。」

「ああ！！マック！！あなたが好きよ！！結婚しましょう！！」

ふわふわわん、そんな効果音がつきそうな感じでマックは現実世界に戻ってくる。

ちなみに、彼はまだ独身である。今はまだ血気盛んな若者にぎりぎり属しているが、今後、花を咲かせられるのかいまいち自信がない。

「とりあえず蜂蜜にうちの薬を全部混ぜて飲ませれば何とかなるかもしれない。」

マックは将来の花嫁を助けるためだと、一人で息まき準備に取り掛かった。

マックの薬屋に取り揃えてある薬は全部で100をも超える。

リチュレ一の薬屋である。・・・と自負している。

マックは鼻歌を歌いながら店にある薬を手当たり次第に集めた。

これでもか、というほど薬を持ってくるとマックは慎重に薬どうしを混ぜ合わせ始める。

しばらくして、マックはやっと薬を全部混ぜ合わせるのに成功し、ほっと息をついた。

それぞれの薬の効果を消すことなく混ぜると言うのは、かなり高度

な技である。宮廷医師もできるか分かったものではない。

「できた、できた・・・後は蜂蜜と一緒に・・・」

彼特製の薬と、蜂蜜を混ぜるとそれを小さなスプーンで彼女の口に入れる。

「んゝ意識がないのにこのままだときついか。水かなんかで飲ませられないかな・・・」

マックは辺りを見回すが残念ながら水など汲み置きしているわけもなく、仕方なく彼はコップに水を注ぎに行った。

しばらくして、なんなく戻ってきたマックは、残った薬と蜂蜜を水と一緒に少しずつ飲ませ、とうとう全ての薬を彼女にのませることに成功する。飲ませ始めてからだいぶ時間がかかったため、かなりあたりは暗くなっている。

「いやゝ、終わった終わった。これで目が覚めてくれると良いんだけどなあ。」

彼は、部屋に明かりをともし、この数日間共に過ごした医療書達を何とはなしに開いた。と、同時に飛び込んでくるのは白紙のページ。

「あれ？確かこれは落丁本じゃなかったはずだけど。あれ？あれれ・・・？」

ぺらぺらとめくってみるとすべてが白紙になっている。おかしい。疲れすぎてとうとう頭までおかしくなったのかと思い、目をこすってもう一度よく見てみる。やっぱり白紙だ。

マックはもう一冊、積み重ねられた医療書を手に取って開いてみる。

刹那、何かがマツクの頬をかすめて跳び出てくるのが分かった。

「!!なんだ!?!」

何かが飛んで行った方へ眼を向けるとぐじゅぐじゅとした子供の落書きの様なものが宙に浮いている。

その黒い丸は、するりと動くとき黒い丸がほつれるように細い線に形が変わる。

マツクはそれを見ただけで恐怖で体が動かなくなる。体に力が入らない。

「ま・・・魔物!!!」

マツクが泣きそうになりながらそう呟くと、細い線の様になっていた何かは突然、口の様なものを開けるとマツクに襲いかかってきた。

「ううわあああ!!!!」

必死で逃げようと、動かない体を無理に動かしたせいかマツクは尻もちをついて倒れてしまった。もう目の前に何かは迫っている。マツクはギョツと目を閉じた。

どれくらい経っただろうか。
気絶してしまっていたのか、マツクはいつの間にか横になっている体を起こした。

体を起してみると、なぜか毛布がかけられており、ベッドに寝ていたことが分かる。

夢でも見ていたのだろうか？ マックはきよろきよろとあたりを見渡す。こぎれいに重ねられた医療書や出しっぱなしの薬は特にいつもと変わらない。

しかし、ふと顔を上げてマックは息をのんだ。

「あの・・・」

マックは壁に寄りかかっていた一人の女性に声をかけた。

声をかけてから、そんなつもりはなかったのにと心の中で焦るが、彼女と視線が合ってマックは息をのんだ。

自分に向けられた漆黒の瞳にマックは吸いこまれるように魅入ってしまった。

第十六話 二人の愛のために（後書き）

投稿が遅くなってしまうして、こんな素人文でも見てくださっている方には大変申し訳ないです。すみません。

最近風邪っぽいなあと思っていましたところ、ほんとに風邪になってしまいました。（今流行りのマイコプラズマなんだとか・・・名前が怖）

しかーし！！マイコなんとかを現代医療の力で治しましたので、今後は早く更新できる・・・筈です。これからも宜しくお願いしますね（苦笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0523x/>

魔王国を建国しよう

2011年11月17日17時37分発行